ゼロ

ハッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロ

【Ｎコード】
Ｎ８０７６Ｂ

【作者名】
ハッシー

【あらすじ】
少年「葵純」は入学式当日に色々な回想に思いを浸らせる・・・・・・

プロローグ

――緑山高等学校入学式

僕は少し乱れた髪の毛をいじりつつ席についた。

周りを見渡すと頭の良さそうな人だらけだ。

さすがは名門高校といったところである。

そして式は始まった。

校長の長々とした話に当然僕は眠気に襲われた・・・・

・・・・が、隣の席からスースーと寝息をたてている少年がいた。

僕は不真面目な生徒もいるのだなと安心した。

第一話：入学（前書き）

主人公葵純（あおいじゅん）は緑山高校の入学。そして新たな友達伊藤明（いとうあきら）と出会う

第一話：入学

――緑山高校一年一組教室にて

僕の席は教卓の真ん前だ。ついていない・・・・

・・・・が、隣には僕のタイプの女の子が座っていた。

足が長く顔立ちもよく、いかにも勉強が出来そうな感じだ。

やっぱりついてると心の中でささやいた。

そして担任は、いかにもボケていそうなおじいだった。

「え～、私がこのクラスの担任を任された田中だ。よろしく。」と先生。

皆もとりあえずよろしくお願いしますと言う。

そして時間割りが配布され今日は終了。

明日は身体測定だ。まだ授業が始まらないことに嬉しさを感じた。

そして家へ帰ろうとした時に、いかにもクラスに一人はいそうなテンションの高そうなやつが話しかけてきた。

「ねぇねぇ、俺この学校に友達いないんだけど友達にならない？あっちなみに名前は伊藤明、アキラって読んでくれ」と一方的な自己紹介。

「こちらこそよろしく、名前は葵純」と、とりあえず挨拶。
そして奇遇にも家は近くだったので一緒に帰った。
「ねぇねぇ、純は中学の時部活なにやってたの？」っと明。
「僕は卓球部だよ、明は？」と返す純。
「俺は帰宅部だったんだぁ・・・どう、見えないでしょ！」と明
確かに明は見るからにスポーツ万能に見える。
「なんで部活入ってなかったの？」と純
「・・・めんどくさかったからだよ。そんなことより近くにゲーセンできたから行かね？」と明。
僕の質問からの間が少し気になったがすぐに、
「おっ、いいねぇ、行こ行こ！」と、純。
そしてしばらくの間彼らはゲーセンで遊び呆けた。

第二話：部活（前書き）

新入生歓迎会や部活紹介を終えた純はどこの部に入るか迷っていた

……

第二話：部活

知らない間に闇は過ぎ去り心地よい朝になっていた。

純は制服に着替えて、適当に手グシで髪を整え、パンをくわえながら家を飛び出した！

学校に着くとすでに学校に着いていた明が何人かの友達と会話しているのが見えた。

明は純の存在に気づくとすぐに近寄った。

「純おはよ～さん！！」朝にも関わらずテンションが高い明。

「おはよ明」と、眠たそうに純は言う。

「そういえば今日は身体測定の後に部活紹介を兼ねた新入生歓迎会があるんだってさ。」と、明。

「そ、そうなの？聞いてねぇよ・・・」と、純。

「純は卓球部入るのか？」と、すかさず明。

「僕は・・・多分帰宅部かな！」と、純。

「そうなんだ！じゃ俺と同じだな！」と、明。

その時チャイムが教室に鳴り響いた。

「じゃまたあとで！」と、明。

軽く純はそれに対して手を振った。

……身体測定も終わり、いよいよ新入生歓迎会が始まった。

中でも部活紹介は皆をあっと驚かせるようなものばかりだった。

新入生歓迎会も終わり純は帰宅部のつもりだったが部紹介をみて何かの部に入ることを決心した。

卓球部に入ろうかとも考えたが、中学時代にあまりいい思い出がなかったので候補には入れなかった。

運動部に入ろうとしたが、純は球技はとても苦手だったのでほとんどの運動部は候補から外れて、結局候補は……

・水泳部
・陸上部
・レスリング部

などの候補をあげたが中々決らない……。

とりあえず仮入をしようとしたが、めんどくさくなり後回しにした。

帰りは明とその友達の、内田や遠藤と帰った。

「俺はサッカー部入るかなぁ」と、内田。

「俺はテニス部！！」と、遠藤。

それを聞いた純は
「俺はまだ決めてないんだぁ」と、ぼやいた。
「なんだよ、帰宅部じゃなかったのかよ、まぁ普通は部活入るもんだよな。」と、明は言った。
しかし純は明の表情が寂しげになったのを察した。
この時純はまだ明の過去を知るよしもなかった・・・・。

第三話：帰り道（前書き）

学校からの帰り道、純達は倒れている人を発見する。そしてその後由香と出会う。

第三話：帰り道

純、明、内田、遠藤の四人は学校からの帰り道、道路の脇で倒れている人を見付けた。

正義感の強い内田がまずその人へ駆け寄り三人も後に続いた。

「大丈夫ですか。何があったんですか。」と興奮気味に内田。

「おい、この人血吐いてるぞ！」と、遠藤も言う。

「ぼ・・・ぼぼ僕も救急車を・・・」純は焦りながら言う。

だがこの状況を打破したのは明だった。

「お・・・尾崎先輩？」

死んだように倒れていた人はいきなり起き上がりこう言った

「よう明、元気だったか」と。

その後明と尾崎は大事な話があると言いどこかへ消えていった。

その後三人も別れ、純は帰路についた。

――葵宅

「あっ、純お帰り。」と、姉貴の咲が言った。

「あれ？親父とお袋は？」と純。

「なんか二人で旅行行っちゃったみたい・・・」と、渋々話す咲。
「は？あり得ないだろ・・・」そういうと純は咲が作った肉じゃがに手をつけた。
「まぁたまには私の美味しい手料理もいいでしょ？」と、咲。
「姉貴の料理クソまじぃよ」と冗談を交わしつつ飯を食い終えた。
そして純は明日から授業ということを思いつつ眠りについた・・・

―翌日

朝のＨＲが始まっても明は来なかった。
風邪かなと誰もが思っていた。
だが暫くすると明は登校してきた。
「明初めての授業サボるなよ！」とふざけ半分に皆は笑ながら言った。
明は
「ホントはズル休みしたかったんだけど親に怒られたからな。」と、みんなに言った。
しかし純は明の顔を見て何となく嘘をついている気がすると思ったが、考えすぎかと悟った。

―昼休み

「そういや昨日のガタイのいい人誰なの？」と、遠藤が切り出した。

明は少し戸惑いながらも

「中学の時の先輩だよ！」と言い放った。

「へぇしかしなんで死んだフリしてたんかねぇ」と純は言った。

「なんかあの人は俺を驚かしたかったからあんなことしたらしいよ」

と、明は言った。

さらに明は続けてこう言う

「俺、料理部に入ろうと思うんだ・・・もちろん今日は仮入するし。」

この瞬間皆の視線は明へと注がれた。

「お・・・お前マジかよ・・・で・・・でも部活に入ることは良いことだ」

と、内田は笑いを堪えて言う。と純は言った。

それに対して純は

「頑張れよ」とだけ言った。

―授業中

純は田中先生の授業での抜き打ちテストに苦しんだ。

意味分かんねぇと思いつつも解答欄はびっしり。

そしてテストが終わった時に消しゴムを落とした。

その消しゴムはある生徒の足元に激突！

やべっ、と思いながら視線を足から顔へ移したときそこにいたのはあの顔立ちのよい隣の席に座っている女子の加藤由香だった・・・・

純の人生が由香との出会いによって大きく変わることをこの時は誰も知らなかった・・・・

第四話：二択（前書き）

純は内田と由香からの勧誘に頭を悩ませていた……はたして！

第四話：二択

授業も終わり家に帰ろうとすると、突然由香が話しかけてきた。

「ねぇ、あなた純君だよね？私のこと覚えてる？」と、言った。

純はわけが分からず困惑した。と、言った。

すると由香は

「まぁ無理もないか・・・私の受験の時に純君の隣に座ってた子だよ！思い出した？」と、言った。

純はなるほどなという顔をして

「あっ、隣に座ってた子ね！あの時はテスト中に君が鼻血だしてたからティッシュを分けてあげたよね！と、言った。」

由香は赤面して

「もう、そんな恥ずかしいことあったわねぇ、あの時はありがとね！」と、言った。

そして二人は学校をあとにした。

とりあえず遠藤とゲーセンに行ってから家に帰った。

自分の部屋に入ると由香の事を思い出した。

入試の時は由香の顔が血まみれで今のきれいな顔立ちの由香とが識

別出来なかったことなども思い出した。
そんなことを考えているうちにやがて眠りについた・・・
起きてみるともう夜の１１時になっていた。
もうこんな時間かぁ・・・と思いつつ、とりあえず勉強をした。
純の部屋はとても綺麗に整頓されていて勉強にはもってこいの空間だ！
しばらくすると、携帯電話が部屋に鳴り響いた。
んな時間になんだろうと思いながらも電話に出ると
「よう、夜遅くにすまんな純」
この太い声は内田だ！とすぐに分かった。
「内田か？どうしたんだ？」ととりあえず返事をした。
「ぃやぁ、なんか今日の体育でさぁ、お前足早かったじゃん？だからさぁ・・・サッカー部に入らねぇか？」と誘ってくる内田。
純は球技はやらないと決意したので
「ぃや、俺はやらない」ときっぱり言った。
すると内田は
「俺・・・サッカーに友達いなくてさぁ、純が仮入だけでもいいからやってくれたら楽しくなるかなと思って・・・ほら、純まだ部活決め

てなかったろ？だから仮入だけでいいから頼む！」と必死に頼んできた。

「まぁ・・・仮入だけなら・・・」と少々強引だなと思いつつも承諾した。

電話を切ると、なんだか内田からの電話が高校になってからの友達からの初めての電話だったので嬉しくなった！

その後純はウキウキしながらも眠りについた。

――翌日

朝起きてみると時間は・・・ヤバい・・・遅刻だ・・・

すぐに着替えて飯も食わずにダッシュで風を切るように学校へ向かった。

すると前方に緑山高校の制服を来た女子が走っていた。しかも足が速い・・・

純は負けず嫌いなのでその女子を抜き去った。

するとその女子は・・・由香だった。

「ゆ、由香？」と、純。

「純？おはよー！」と、由香。

とりあえず二人はダッシュで学校に向かい、なんとか学校には間に

合った。

「はぁ、はぁ、なんとか間に合ったな。」と、純。

「そうだね・・・てか純くん・・・足速いね・・・昨日の体育の時間も思ったけど何かスポーツやってるの？」由香は言う。

「いや・・・何も・・・」と、純。

すると由香は

「じゃ、じゃあ純陸上部入らない？私も陸上部なんだ」と突然の勧誘。

「・・・えっ？」純はテンパった。

これで純にはサッカー部、陸上部という選択肢が出来た。

第五話：病院へ（前書き）

純はサッカー部の仮入を楽しんだ・・・・そして・・・・姉は倒れてしまった

第五話：病院へ

学校に着くと、早速内田が駆け寄ってきた。

「昨日はワガママ言ってゴメンな、帰りにオゴルよ！」とだけ言った。

「おぅ、サンキュー。」と純は返事した。

放課後に、サッカー部を仮入した。サッカー部の先輩達はとても優しく、やりやすかった。

しかし、純はサッカーは自分には合わないと思い、

「内田・・・僕サッカー部は向いてないみたい・・・だからお前一人で頑張ってくれ。」と言った。

内田は

「まぁ俺が勝手に誘っただけだからな、お前も早く自分に合う部活探せよ。」と言った。

純はそのセリフを聞いて頑張らなきゃと思った。

その夜、家に帰ると姉貴の咲はロデオボーイに乗っていた。

「私痩せるんだから！」と張り切っていた。

純は馬鹿馬鹿しいと思いながらも眠りについた。

――翌日

学校に着くと由香が
「今日は陸上部仮入ね」と言ってきた。
純はそれに返事をした。
そして授業中、いつも通り田中先生のつまらない授業を受けていると・・・・
「ピロリロリン」
突如携帯が鳴り始めた！教室にざわめきが走った。しかし・・・・
「もしもし・・・・」と、突如先生が携帯を取り出して話始めたではないか！！
なんだよ・・・先生かよ・・・と内心純は思ったが、先生の顔が急に険しくなった。
「何、そうですか、すぐ向かわせます。」と声を荒立てて先生は言った。
「おい、葵、お姉さんが拒食症で倒れたそうだ。行ってやりなさい」と先生は優しい一声をかけた。
純は病院へ急いだ。そして次の角を右に曲がろうとした時・・・・・・

第六話：入院（前書き）

純は咲の入院している病院へ急ぐが、事件に合う。そして尾崎先輩現わる。

第六話：入院

右に曲がるといきなり居眠り運転のトラックが突っ込んできた。
純は持ち前の反射神経で左の方へ転がり回避した。
しかし、トラックも左へそれて純めがけて突進。
もう駄目だと思った・・・その時！
・・・・・純は目を開くとそこは病院の中だった。
どうやらあのあと気絶してしまったみたいだ。
そして純の左足には包帯がグルグル巻きに巻かれていた。
医者の話によると純はひどい捻挫や足の数ヵ所を骨折してしまったみたいだ。
そして気付いてみると、隣には咲と小さな女の子が純と同室で入院していた。
「姉貴！」と、純は声をかけた。
「純、心配かけてごめんね。てか純大丈夫？」と、申し訳なさそうに咲は言った。
「こんなもん平気だよ！」と、純は笑ながら言った。

「そう言えばここまで運んできた尾崎さんて人に感謝しなさいよ！」
と咲は思い出して言った。
尾崎・・・明の先輩か！と、思い出した。たしか倒れたふりしてた人だ！とその時の映像を回想した。
そしてしばらくすると、病室に明が勢いよく入ってきた。
「明、見舞いに来てくれたのか。」と、純が言った。
すると明は思いもよらぬ返答をしてきた。
「純？何でこんなところに・・・てかなんだよその足！」
純には何がなんだか分からなかった。
「あ、明？俺が入院してるから見舞いに来たんじゃ・・・」純は言う。
すると明は純の隣にいた小さな女の子に寄り添い
「実は・・・こいつ俺の妹なんだ・・・」と言った。
純は一瞬明が何を言っているのか分からなかった。
しばらくするとやっと事を理解し
「明に妹いたんだぁ・・・」と納得したように言った。
すると小さな女の子がいきなり
「お兄ちゃん、お腹すいたぁ」と言い出した。

明は
「はいはい」と言うとどこからともなく明専用鍋とコンロと食材を取り出して凄い早さでお粥を作り出した。
純はこの時明が料理部に入った理由を知ったのだった。

第七話：過去（前書き）

純は明の過去を色々と知ることなる……

第七話：過去

明の妹の桃は、お粥を食べ終わるとぐっすりと寝てしまった。

すると明は

「こいつ・・・白血病なんだ」と、小さな声で言った。

純や咲はその話を黙って聞いた。

「あいつは幼稚園の時はいつも元気で、走り回ってばっかりだった・・・何事にも積極的で、家の手伝いなどもしっかりやっりしてほんとにいい子だった・・・だけどあいつが年長になった時に両親が交通事故で亡くなったんだ・・・これが去年のことだ。」

純と咲は目を合わせた。

「それからというもの、俺は桃の世話をしてやったが親がいないというショックにかられて白血病に・・・」

病室は沈黙になった。

するといきなり桃がベットからガバッと飛びだし

「お兄ちゃん、私は大丈夫！お医者さんだって白血病治るって言ってたじゃない。だからもう・・・お兄ちゃんは自分のやりたいことをやって！私もう小学生だよ？私お兄ちゃんが陸上やってない姿なんて見たくもないわ」と涙ボロボロで言った。

純は明が陸上をやっていたことを初めて知った。

明は
「しかし桃の体が心配だ・・・・」と言った
桃は
「だ、だけど、お兄ちゃんが陸上やってない姿を見てる方がもっと病気悪化しちゃうよ・・・・」と言った。
これを聞いた明は黙りこくって走りながら部屋を出ていった。
部屋では再び沈黙が続いた。
すると純も部屋を出て明を追いかけていった。
「ちょっ、純?」咲は叫んだが時すでに遅し・・・・だ。
しかししばらくすると純は
「イタタタター」と言いながら包帯が巻かれている場所をさすった。
「骨折してるのに全力疾走する馬鹿がどこにいる!」と咲はキレた。
「ご、ごめん・・・・」と純は謝った。

翌日

純と咲は退院した。しかし純は当分松葉杖生活となった。
「はぁ、当分部活の下見とか出来ないなぁ・・・・」と純。

すると一緒に登校していた由香が
「まぁその足じゃしょうがないよ・・・」と言った。
「あ～あ、明が前に陸上やったことあるって聞いたから少し興味持ったんだけどなぁ」と純は残念そうに言いった。
すると由香は
「明君って・・・やっぱり陸上部だったの？」と驚いて言った。
純は
「そうだよ！」と、由香があたかも陸上部だった事を知っていたみたいな口調を気にしながらも言った。
少しの沈黙が流れ、由香は言った。
「純・・・明君は多分・・・中学生の時にインターハイで3位だった人かも・・・昔明君にそくっりな人本で読んだもん・・・」
純はこの後明の過去を知っていく

第八話：第二の人生（前書き）

明は立ち上がった・・・・逆境と困難を乗り越えて・・・・そして純の足は・・・・

第八話：第二の人生

純は学校に着くと明の所へ駆け寄った。

「お前・・・陸上やってたんだな・・・しかもめちゃ速いらしいじゃないか。」

すると明は

「そんなの昔のことだ・・・」冷たくと言った。

純は

「だけど今から陸上始めたって遅くは無いじゃないか！」と少し大声で言った。

明は

「それじゃぁ桃の面倒は誰が見るってんだ！」と怒鳴った。

純は

「病院に任せればいい、それに部活をやりながらだって毎日会えるじゃないか！」と説得した。

明は拳を握って悔しがりながら

「俺だって・・・陸上やりたいさ、陸上やってる時が一番楽しい、だけど・・・」

純は

「一人で悩むな・・・僕達友達だろ」と言った。

すると内田や遠藤もやって来て

「お互い悩みがあれば話し合うってのが友達だぜ！」とかっこよく言った。

明は泣きながら

「みんな・・・」といった。

・・・そして

明は陸上部に入部した。

入部までには色々とあった。

料理部の部長に止められたり、周りの人からは妹を見捨てたという批判もあった。

だけど・・・明は諦めなかった。陸上で日本一になり、桃を喜ばせる事が明にとって桃を救える唯一のことだと悟ったからだ。

こうして明は第二の人生の一歩を踏み出したのだった。

しかし・・・純の足は・・・完治するにはほど遠かった。

純は家に帰る途中、木下病院へ寄った。

病院の先生は完治1ヶ月半と言った。

純はこの時、明、待ってろよ、という気持ちで一杯だった。

第九話：休息（前書き）

みんなはゲーセンへレッツゴーしたよ。なんか嫌な予感するよ・・・・

第九話：休息

さんさんと降り注ぐ太陽の光が少し早い夏を予感させた（といってもまだ5月）

純とその仲間たち（いつもの4人）はゲーセンへ行って束の間の休息を味わっていた。

明
「純、ありがとな、お姉さんに桃の看病頼んじゃって。」

純
「いいんだよ、姉貴も桃ちゃん大好きだし」

明
「ホントありがとな！」と言った。

遠藤は
「ところで何のゲームやる？毎回格ゲーじゃ飽きてくるぜ、キー」
と奇声をあげた。

すると左の方から
「ヒュッ、ヒュッ」と何かを投げる音が聞こえた。

4人は音のする方へ振り替えるとソコには
「ダーツ」を楽しむ人がいた。

内田は
「お、おいみんなダーツしようぜ！」と言った。

内田の目が燃えていたのでもう内田を止められるヤツはいないと3人は察し、ダーツをやることにした。

4人は百円ずつ入れ
「301」をやった。

ルール

持ち点が301あり、ダーツで的に当てた点だけ301から引かれていき、最初に0点取ったものの勝ちというものである。

ただし、点数が0点を下回った場合は投げる前の点に戻るという具合である。

1人1ターンに3投投げられる。

例えば残り20点の時30点取ったらマイナスなのでまた残りは20点になる。そしてその時は3投投げなくても強制的に次の人にターンが回る。

さて、準備は整った。いざダーツというなの合戦へ！

・・・1投目・・・投げたぁ・・・わぁ・・・果たして・・・結果は・・・次話へ続く。

第十話：ダーツ（前書き）

純はダーツを楽しんだが負けそうだ、ガンバレ純、負けるな純！！

第十話：ダーツ

純はダーツを風のごとく投げた・・・・６点！

純はこの後もクソで最悪だった。

次に明！ダーツは真っ直ぐ突き刺さり高得点！

内田はクソで２６点だった。

続く遠藤は

「スーパーミラクルスパイラルスロウ」と言いながら投げた。すると流石テニス部！総合９６点だった。

これが永遠と続き、６巡目を終えた時点で

残りは

純：１６２点

明：５１点

内田：１２１点

遠藤：３２点

となった。

純は悔しがりながら次のダーツを投げた・・・・すると・・・・５０点を当てた！乗りに乗った純はまたしても５０点を当てた！最後は２６点。

純は一気に距離を縮めたため喜んだ。

しかし・・・・明は凄かった・・・・なんと・・・・三投投げて・・・・残りは三点

だった。

続く内田もなんやかんやで純と同じ残りは３６点だ。

遠藤は相変わらずのコントロールで残りは１５点

やっと楽しくなってきたぜとみんなは思った。

しかし隣からいきなり妙な声が聞こえた。

「あちょぇ～」

誰だ？と思った次の瞬間！

明

「尾崎先輩じゃないすかぁ」

尾崎

「よう明、元気してるか」

明

「元気してますよ」

尾崎

「そりゃよかった、お前がまた陸上始めてくれて俺は猛烈に感動している！」

明以外の３人は会話に入れなかった。しかし純は、

純

「あ、あの尾崎さん、以前はトラックに引かれた時に病院に運んでくださいましてありがとうございます」

尾崎

「あぁ、例にはおよばねぇ、明の友達だかんな」とピースをした。

その後はなんやかんやでダーツは遠藤がピッタリを出し1位、思わぬ才能を見い出した。

明は残り3点で2位

純と内田は同着ビリだった。だせぇぜ。

4人はゲーセンを出て別れた。

純は帰り際にまた木下病院へ行った

木下先生

「う～ん、なかなか回復が早いねぇ、こりゃあと2週間ぐらいで完治だよ」

純

「ホントですか？じゃぁ僕は陸上やれるんですね？」

先生

「うむ、だけど無理はしちゃいかんぞ！」

純

「はい！」

純はルンルンで病院を後にした。

家に着くと安堵の表情でいつもより早く眠りについた・・・・

第十一話：完治（前書き）

純は変な夢を見た。そしてその後怪我は完治して。贅を尽くした。

第十一話：完治

そこはほの暗い洞窟の底だった・・・純はその中にいる・・・なぜここにいるのかは知らない。しかしそこは絶対に入っては行けない場所だということだけは察知した。純は近くに人影を見た。

「助けて・・・」という一心でその人にすがり付く・・・

――純は目覚めた。

そう、夢を見ていたのだ。

純はわけが分からずしばらくはボーッとしていた。

少したつと純は我にかえり学校へ行く支度をした。

朝御飯は昨日の残りの肉じゃがを食べた。

そして純は家を出た・・・

学校へはいつも通り由香と陸上の話をしながら登校した。

学校に着いた。

最近は足の痛みが治まり、松葉杖無しでも歩け回れるようになった。

明

「もうすぐ完治するな、治ったら陸上部入るんだろ？」

純

「そりゃ入るよ。明には負けてられないぜ。」

純は小・中学生の時も足の早さに関しては誰にも負けたことが無かったため
足には自信があった。

明
「てか俺ブランクがあったから練習とかもかなり辛いよ・・・」

純
「そうなんだ・・・俺もヤバイかな？」

明
「どうだろうなぁ・・・あっそういえば陸上部の部長はかなり足が早いみたいだぜ、去年インハイ出場したって言ってたし」

純
「そうなのか？そりゃますます腕がなるぜ」

明
「まぁせいぜい足を治すこったな」

純は足の怪我のことを思いだし、早く治さなきゃということを再確認した。

こうして一週間がたち、純の足は無事完治したのだった。

木下先生
「うむ、これならもう走っても大丈夫」

純
「ホントすか？あざぁす！」
純は病院を飛び出し近くの河原までダッシュした。
俺走れてる！と思うだけで純は心が弾んだ！
芝生に寝転がると太陽が眩しく思わず目をつぶった。
横を向いて目を開くと・・・・そこには洞穴があった。
あんな場所あったかなぁ・・・・と思いながら洞穴に近づいてみる。案外深いようだ・・・・中に入ってみるとジメジメしている・・・・
なんだこりゃ！気持ちワリ！と思いすぐに引き返した。
しかし運悪く転んでしまった。するとその衝撃で洞穴が倒壊し始めた。
純は急いで外に出ようとするが・・・・もう遅かった・・・・
純はそのまま生き埋めになった・・・・

第十二話：スタート（前書き）

純は目を覚ますとそこは見覚えのあるあの風景……病院

第十二話：スタート

純は目を覚ますとそこは病院だった。

純は洞穴で生き埋めになった事を思い出した。

咲

「純！あんた何バカなことやってるの！まったく・・・怪我が無かったことだけでも感謝しなさい。」

純

「はい・・・・」

純は前に見た夢の事を思い出した。

あれは予知夢だったんだ・・・・

純は怪我が無かったので直ぐに退院した。

しかしこの出来事が原因となり、山などの土砂崩れが起こりそうな場所（急な坂）が苦手になってしまった。

――翌日

純は陸上部の入部届けを顧問の田中先生に渡した。

先生

「うむ、確かに受け取った。今日からお前も陸上部員の仲間入りだ！」

純
「はい！ありがとうございます！」
ということで、早速、明と由香とで部活へ行った。
まずは部長の挨拶だ！部長の名前は久住だ！
久住
「お前が新入部員の葵だな？よし、今日は全体の流れを見ながらここの部活がどんなことをするかをつかんでくれ！」
純
「は、はい！」
純は久住の体格のデカさにビビったが、すぐに平常心を取り戻した。
純は練習を見ていると、あんまり辛そうには見えなかった。
久住
「今は大会の時期だからなぁ、あんまりキツい練習はしないんだ。」
純はこのあとも色々な事を久住に聞いてその日の練習は終わった。
──帰り道
明
「純は当然短距離入るんだよな？」
純

「もち」

明

「そうか・・・・俺等ライバルだな！」

純

「そうだな・・・・まぁ僕なんか明の足元にも及ばないけどな」

笑いながら純は言った。

しかし明は気付いていた。純の秘めたる力に・・・・

純は途中スポーツショップで明とともにスパイクを買って帰った。

純

「なんかやっと陸上部入ったって感じしてきた！！」

明

「そうだな、純・・・・お前頑張れよ！」

そう言った後明と別れた。

そして翌日。

明は今までよりも部活着のだけ重くなった鞄をギュッと握りしめ、

心地よい風とともに家を飛び出した！

第十三話：決意（前書き）

純は陸上部に入った。そして明とガチった。そして勉強会も開催！

第十三話：決意

緑山高校、そこはタータン仕様の直線の１００Ｍが完備されている。

この良い環境で純はどうなるのか？

そしてそこには授業が終わり、部活へ行こうとする純の姿があった。

純

「今日は明は両親の墓参りかぁ・・・部活心細いなぁ・・・」

すると・・・

由香

「なぁにシケタ顔してんのよ、だらしないわねぇ、私って人がいるでしょ！」

純

「んぁ？そうだな。ありがと。」

由香

「いいのよー。」

そして部活を始めた。純は部活はもう４度目だったので大分なれていた。

そしていい汗を流し、気持ちよく部活を終わらせた

次の瞬間純はとんでもないことを聞いてしまった。

久住
「さぁーて、今日が試験前最後の練習だ。ひとまず部活の事は忘れて勉強に集中しなさい」
はっ？純は思った。もうそんな時期？いつの間に？しかもつぎの久住の言葉によってさらに純は追い討ちをくらった。
久住
「ちなみにテストで赤点とった馬鹿野郎は試験後も部停だからな」
純はその場で口をポカーンと開けた。
そして純はその夜勉強に集中した・・・らしい。
日曜日、純は明と陸上競技場へと足を運んだ。
勉強ばかりじゃ頭がいかれるからね。
明
「純は競技場初めてだよな？ここで走ると病みつきになるぞ！」
純
「そうか、早く走りたいなぁ。」
明
「俺も早く走りたいよ！」
そして二人はなんやかんやで１００ｍを勝負することになった。合図はその辺にいたおばちゃんに頼んでもらった。

おば
「いちについて、よぉい・・・・ドン」
二人はさっそうと走った。
純にはこの走りが一瞬に感じた。
結果は言うまでもない。
しかし純にとってこの走りは一生忘れることの無いものになった。
その後純は明に言った。
純
「次はお前には負けない」
明
「おぅ！俺も負けないぜ！」
こうして二人はさらに友情が深まった。
そして試験前日、彼らはその友情をバネに、一緒にテスト勉強をした。
当然勉強のできる内田や遠藤、さらには新しい仲間、剣菱（けんびし）も加わった。
舞台は遠藤家。果たしてどのような勉強が繰り広げられるのか！

第十四話：勉強会（前書き）

５人は勉強会を開いた。そして勉強した。だが勉強をしているとヤツが現れた。

第十四話：勉強会

遠藤家ではしばらく沈黙が訪れた。まぁ勉強中だし・・・・。

しかしその沈黙を破ったのが遠藤母だ！

遠母

「あんらぁ。みんな勉強頑張ってるのねぇ、感心感心。あっこれジュースね」

と言って御盆の上にある何故か湯飲みに入っているオレンジジュースを皆に渡した。

遠藤

「か、母さん、なんで湯飲みなんだよ！」

恥ずかしそうに言った。

遠母

「飲み物なんてどの容器で飲もうが一緒よ！それではごめんあそばせぇ！オホホホホ！」

そう言って彼女は部屋を出ていった。どうやら遠母はかなりクセがある人みたいだ。

遠藤

「ったくもう、みんな気が散っただろうが気にすんなよ。」

みんな

「あ・・・あぁ。」

だがすでにみんなは気が散って勉強どころではなかった。

しばらくしてまた勉強に集中してきた一行。

しかし・・・次は何者かが窓から入ってきた。

遠藤

「だ・・・誰だ？」

すると

尾崎

「わはははは、俺だ、尾崎だ。明元気にしてるか。」

明は呆れてものが言えなかったため頭を抱えた。

尾崎

「ん？勉強中か、こりゃ場違いだな。俺は帰る」

そういって遠藤家の玄関を通ってどこかへ行った。

全くもって迷惑な男だと思った。

しばらくするとまた勉強に身をいれた。

だがこの静けさも長くは続かなかった。

「グゴォ～」

剣菱のいびきだ。

純
「コイツ寝てるぞ。」

内田
「だめだなこりゃ」

とりあえず剣菱は遠藤のベッドに　寝かせておいた。

再び勉強を再会。

純
「ここの問題どうやって解くんだ?」

明、内田、遠藤はその問題を見たが分からない・・・・

そう、この四人はクラスの中でもずば抜けて頭が悪いのだ。

内田
「どうすんだべこの問題・・・・」

遠藤
「よし、母さんに聞いてみよう」

遠母
「あんらまぁ、この問題懐かしいわぁ!どこかで見たことある。」

四人は顔を見合せ喜んだ。しかぁし・・・・

――30分後

遠母
「あんらまぁ、やっぱり解けないわぁ、ごめんなさいね、オホホホホ」

と言いながらどこかへ消えてしまった。

遠藤
「くそう、俺等はどうすればいいんだ！」

苦しんでいたその時！

剣菱が起きた。

純
「うおぅ、剣菱。天才のお前ならこの問題解けるよな？」

そう、剣菱は頭がいいのだ。だからこの勉強会に呼んだのだ。しかし・・・・

剣菱
「ふぁぁ？1＋1＝2に決まってるだろ？」

剣菱は寝ぼけていた。

内田
「剣菱使えねぇ。」

果たして彼らの運命は？

第十五話：苦しみ（前書き）

彼等の勉強はヤバい！てか死人出るんじゃない？怒濤の十五話！！

第十五話：苦しみ

純
「この問題誰も分からないのかぁ……」

そして気付けば時間は夜7時を回っていた。

内田
「あ～、分からない！どうすればいいんだぁ！」

明
「こんな時はダンスを踊ろう。」

純
「明……頭壊れたか……」

そして明は頭が壊れた。

明脱落

剣菱も脱落したからこれで生き残りは3人だ！

遠藤
「てか眠くなってきたな。」

内田
「あぁ、てかこんな難しい問題より簡単な問題先やろうぜ！」

この意見に皆は賛成した。

そしてみんなはしばくの間勉強に集中した。

すると・・・・

尾崎

「よう、さっき忘れ物しちゃって・・・・とりにきたぜ」

そういうと尾崎は床に落ちているビー玉を手に取った

尾崎

「ところで勉強は進んでるのか？分からない所は俺に聞け。」

純

「は、はぁ・・・・」

そして例の問題を渡した。

尾崎は凄まじいペンサバキでノートに答えを書いていく。

尾崎

「よぉし、出来たぞ！」

純

「ホントに解いちゃったよこの人」

すると尾崎は脱落している明を見つけた。

尾崎

「おい、明、どうした？誰にやられたんだ？オオーイ！」

純
「明は勉強という敵に負けました。」
尾崎
「そうか・・・さぞかし辛かったろう。」
尾崎はなごりおしみながらも帰っていった。
純
「よし、やっと勉強全部終わった！これで解散だ！」
すると・・・剣菱が起きた。
剣菱
「おぉ、勉強終わったか、てかお前ら全部自分で解いたのか？やればできるじゃないか、この答えを見なくたってな」
そういうと剣菱は机に試験範囲の答えを投げ出した。
内田
「こ・・・これは」
剣菱
「これはって答えに決まってるじゃん！あっお前達試験範囲外のとこもやったんだ」
そういってさっき苦労して解いた問題を指さした。
遠藤

「試験範囲外かよ。」

彼等の夜は更けていくのだった。

第十六話：開花（前書き）

試験にのぞむ純や明。その後部活に出るが純が思わぬ才能を開花させる

第十六話：開花

――テスト当日

明
「俺昨日あんまり勉強してねぇからヤバい！」

そう、明は倒れてたからあまり勉強していないのだ。

純
「お・・俺も試験外のとこ勉強してたからあんまり・・・・」

そしてそうこう言ってる間にもテストは始まった。

最初のテストの理科が終わった。

純
「理科結構できたぁ！」

剣菱
「俺もかなり出来たぞ！」

明
「・・・・・・・」

明は手を震わせ顔がみるみるうちに青ざめていった。

純
「明、ひょっとしてお前・・・ヤバいのか？」

明
「ち、違う・・・理科は出来たけど次の英語のテストがヤバい・・・・」
そう、明は英語が格別に駄目なのだ。『ｗｏｒｋ』と『ｗａｌｋ』の差も分からないほどに・・・・

純
「落ち着け明、まだ駄目と決まったわけじゃ・・・・」

明
「純、俺を慰めてくれるのか・・・・ありがとう。」
そういうと明の顔は青色から元の色に戻っていった。
そして英語のテストが始まった。
そして英語のテストは終わった。

純
「明、出来たか？」

明
「あぁ、ちゃんと『ｗｏｒｋ』と『ｗａｌｋ』の区別ができたぜ！」
純は安心した。
そしてかれこれ最終科目の数学。
田中先生

「始めてぇ」

ヤル気の無い声が響き渡った。

純はこの数学をかなり勉強したので自信はあった。

そして終わった。

教室を出て部活へ向かった。

純はこの時解放感を感じた。

――翌日

緑山高校の陸上部は競技場へ行った。

久住

「今日は久々の競技場だ！気合い入れてくぞ！」

みんなはそれに頷いた。

そして練習開始。

色々やって、スタート練習に入った。スタートは以前明に教えてもらったので少しはやり方を知っていた。

純は自信満々にスタート練習に取りかかり、スタートしようとした時。

久住

「違う、お前そんなスタートの仕方じゃ速くならんぞ」

純

「そうすか？」

久住

「お前、もう少し腰上げてみろ。」

純は少し動揺しながらも、言われた通りにやってみた。すると・・・・

純はスタートした瞬間、一瞬風になった気分になった。

そのスタートを見た部員達はみんな愕然とした。

久住

「お前・・・かなり速くないか？」

純は自分では気付いていなかったがスタートがみんなよりも断然速かったのだ。

明

「それでこそ俺の見込んだ男だぜ。」

明は影でヒソヒソと呟いた。

この後純は『スタートの葵』と呼ばれることとなる。

第十七話：再来（前書き）

スタートが上手いと言われた。そして、あの人が帰ってきた！！！

第十七話：再来

スタートの練習が終わり、次は中間走の練習、まぁいってみれば加速の練習をした。

純は走ったが隣で一緒に走っている明にヒュルリと交わされた。

純
「いやぁ、明早いなぁ」

息をあらげながら言った。

明
「純だって練習すればこれぐらい行くと思うよ。」

純
「そ、そうかな…なんか照れる。」

明
「いや、誉めてないから。」

そして純は数本走って、久住部長などにも色々教わり今日は終わった。

帰りは由香と一緒に帰った。

由香
「なんか純ってかなりスタート早くない？」

純
「そ、そうかな、なんかスタートの瞬間だけなら誰にも負ける気がしないんだよね」

由香
「スタート得意とかいいなぁ・・・私はスタートは全然ダメなんだぁ・・・今度純に教えてもらおうかなぁ♪♪」

純
「でも俺人に教えるのは苦手で・・・」

純がそれを言い終わる前に

由香
「じゃぁ来週の日曜日によろしくね」

そう言って由香は一方的に提携を交わした。

純はまぁいいかと思い、承諾した。

そのあと二人は個々の帰路に着いた。

純は家に入るとソコには両親が旅行から帰ってきていた。

父
「純おかえり。」

母
「純、今さっき帰ってきたわ」

純
「おかえり・・・」
てか旅行で一ヶ月以上も家空けるなとか思った純と咲であった。
咲
「てか私一回入院して大変な事になったしぃ」
父
「それは本当か！父さんは聞いてないぞ！」
母
「私は知っていたわ・・・純から聞いていたし、それにたいしたこと無いって聞いたから、思いきって旅行していたぁ。」
父
「そうか・・・まぁ今が元気なら何よりだ。そんなことより純、新しい学校はどうだ？」
純
「うん、楽しくやってるよ。」
父
「そうか、部活はどうなんだ？また卓球部か？」
純
「違うよ、僕陸上部入ったよ。」
すると父の表情が変わった。

父
「何？陸上部だと？」
父の険悪なオーラが純を包み込む。
純
「どうしたの？」
恐る恐る聞いてみると・・・・
父
「陸上部かぁ、俺も昔は陸上部だったんだ。」
嬉しそうに言った。
純はわけが分からずに目をパチクリさせた。
純
「父さんは昔は卓球部だったんじゃ・・・・」
父
「ん？あんなの嘘に決まってんじゃん。」
騙されたぁと純は思った。
父
「まぁお前も昔の俺みたいにインハイ行ってくれよ」
純
「それはちょっと無理があるかと・・・・って父さんインハイ行ったの

？」

父

「そうだぞ、まぁ優勝はできなかったがな。だから父さんの変わりにインハイで優勝してほしい。」

純は優勝は無理だろぉとか思ってしまった。まぁ実際に不可能な話である。

父

「まぁ何はともあれ頑張れ。」

純は自分の部屋に戻り、色々考えた。そして知らぬ間に寝ていた。

第十八話：記録会１（前書き）

純は定期的に行われる陸上の記録会に出ることになる。対する明は……

第十八話：記録会１

純は夢の中でこんな夢を見た。

明がインターハイへ行き純だけが取り残される夢。

明は最近よくこの夢を見る。

これは予知夢か？などと思ったりもするが純はそんなことは無いと自分を励ました。

そしてあくる日・・・テストが帰ってきた。

純

「僕・・・赤点無いじゃん！」

純は部活を続けられる喜びを感じた。

明も英語でスレスレだった。

とりあえず内田、遠藤も赤点をとらずにすんで、みんなハッピーだった。

そして放課後田中先生が陸上の記録会の話をした。

先生

「あぁ・・再来週の日曜日に記録会あるから出たい種目この紙に書いて提出して。」

純はその紙を見た瞬間、目が輝いた。記録会といえど純にとっては正式タイムをとるのは初めてだからだ。

純
「よぉ～し、頑張るぞ！」

明
「気合い入ってんなぁ、俺も頑張んないと♪♪ところで純はどの種目でるの？」

純
「僕はやっぱり１００ｍかなぁ、明は？」

明
「俺も１００ｍかなぁ・・・」

純
「ところで明って中学時代ベストタイムはいくつだったの？」

明
「あぁ、俺は一応・・・」

明が言葉を言い終わる前に、

久住
「おぉ、明探したぞ。お前は中学時代しょっちゅう１００ｍ走ってたみたいだから今回は４００ｍやってみろと田中先生から言伝てを預かってきた。」

明

「マジスかぁ？俺４００m苦手なのに・・・・」

久住

「まぁ気合いで頑張れ！」

明

「は・・はい」

純

「お前も不運なヤツだなぁ」

笑いながら言った。

明

「まぁ俺には体力が足りないから丁度いいかもしれないな。」

純

「まぁお互い記録会がんばろうぜ！」

この後純と明は種目を書いた紙を先生に提出した。

その後純は一回一回の練習に集中して、加速走も大分早くなっていった。

そして二週間後・・・・

純は記録会のある競技場に向かった。

第十九話：記録会２（前書き）

純は初めての記録会に挑む、そして明も負けじと頑張る！由香も・・・

第十九話：記録会２

純は１００ｍにそなえてアップを始めた。

今日の調子はバッチリのようだ。

純はよりいっそう気合いを入れてストレッチをした。

そして・・・ついに始まった記録会、最初は女子の１００ｍで由香が出ていた。

あっという間に時は流れ由香がした。記録は１３”３６だった。

純は速いなぁと思ったがすぐに気持ちを切り替えた。

純は５組目に走る予定だが、その前の４組目に明が走る。

明はスタート地点に立ちスタブロをセットして試走をした。調子はかなり良いように純には見えた。

そして

「位置について」

トラックは静まり返る。

「よ～い」

そしてついに

「パァン」

雷管の音がトラック中に鳴り響いた。

明のスタートは他の者とは比べ物にならないもので、序盤はずば抜けて1位だった。

その後もこれでもかといわんばかりの速さで加速していきゴールした。

電光掲示板に明のタイムが表示される。

「10”98」

純は速えぇとだけ思い、自分のスタブロをセットした。

心臓の音が体中にコダマしているのが分かる。

純は気を一点に集中させた。

試走をしてついに

「位置について」

運命の瞬間がやってきた（所詮記録会だけどね）

「よ～い」

その言葉が出たその時。

純の顔にハエがとまった。

純

「のわぁ～」

審判

「はい、ちょっと立って」

純はやってしまったという気持ちにかられた。

純は審判に注意を受け再びスタート地点へ。

ハエがとまったおかげで緊張がほぐれてきた純。

そして

「よ～い」

「パァン」

純は得意のスタートでみんなよりも体３つ分前に出た。

純を見た観衆がざわめきだした。

純はそのまま加速へと転じた。

しかし純は加速の時に力んでしまい思うように体が動かない。

その隙に隣のレーンの人が並んできた。

純は焦りに焦ったが、途中で冷静さを取り戻し、リラックスした。

しかし時はすでに遅しで、隣のレーンの人に並ばれたままゴールした。

純

「はぁはぁ、チクショー。」

そして純のタイムが掲示された。

「１１”３１」

これが純のデビュー戦だった。

第二十話：記録会３（前書き）

純は自分の記録を見て驚く。そして明は・・・・
久住先輩も黙っちゃいない

第二十話：記録会３

「１１”３１」

純は自分のタイムを見てビックリした。まさかこんなに速いなんてね。

明が純のもとにより

明

「おつかれさん、俺にはまだ追い付かねぇなぁ、まぁ頑張れよ。おっと、この後は４００ｍだ、じゃぁなぁ。」

明は手をふってどこへ行った。

純

「はて？明は１００ｍ出ないん予定だったのになんで出てるんだ？」

久住

「それはお前と勝負したかったからだよ。」

いきなりノッソリと現れた。

純

「久住先輩！」

久住

「あいつもバカだな、こんなやつをなんでライバル視してるんだか。」

純
「そうですね。」

久住
「ところでお前、リレーやってみたくないか？」

純
「リレー・・・・ですか？」

久住
「そう、４継（４×１００ｍ）リレーだ。」

純
「なんで僕が？」

久住
「なんでって足速いからに決まってるだろ！俺等はもう引退だから、明と純で抜けた分を埋めてもらおう思ってな。」

純
「なるほど、そういうことですね！合点承知です。」

久住
「ふっ、頼もしいな。」

そしてそうこうしているうちに、明の４００ｍが始まった。

「位置について、ヨーイ、パーン」

明はおもいっきりスタブロを蹴った。

見たところ、序盤はあまりスピードを出していないみたいだ。

しかし、

久住

「バカモン、どうせ記録会なんだから最初から飛ばしてけ、ビビッテンじゃない。」

すると明はいきなりスピードを上げた。

どんどん加速していったが、ラスト１００ｍはさすがにヘバッタみたいで、スピードが落ちていった。

しかし、なんとか1位でゴールした。

電光掲示板には

「５１”８９」

と表示された。

純は明のもとに駆け寄り、

純

「明お疲れ。なかなかいいタイムじゃん！」

と言った。しかし

久住
「お前は後半が悪い、そこさえ直せば、１００ｍももっと良くなるぞ。」

明
「はい！」

久住先輩厳しいなぁと明は思ったが、それほど明に期待をしているんだなぁと思った。

この時純は自分も期待される人間になりたいと思った。

第二十一話：記録会４（前書き）

記録会では３年生最後の戦い、マイルリレー（４００×４）が始まる

第二十一話：記録会４

さて、記録会も終盤へと近づいて参りました。

緑山高校は残すところマイルリレーだけとなった。

メンバーは県大会で敗退してこの記録会で引退の３年生軍団

１走：小林

２走：久住

３走：佐藤

４走：清水

だ。

あと一時間でマイルリレーが始まる。

メンバー達はみんなリラックスしていた。

純はこれで先輩達は引退だから精一杯応援しなければと感じた。

そしてその時はやってきた。

チーム緑山（勝手に命名）の小林がスタート地点に着いた。

競技場は一旦静かになった。

そして瞬く間に時間は流れ、みんなはスタートした。

緑山高校一同

「ファイト、小林先輩！」

すると小林はその声援に答えるかのように、加速していった。

小林の顔はしわくちゃになりながらも、バトンは久住に渡った。

この時点で前には４人。

緑山高校一同

「うちらのそこ力見せたれ久住先輩！」

すると久住は序盤から体力を余すことなく使い始めた。

２００ｍ通過時点で久住はトップに躍り出た。

この時純には胸に何か燃えたぎるような何かを感じた。

そして久住は３００ｍ地点でかなりの差を着けて通過。

その後のラスト１００ｍは・・・見事に失速。最初にとばしすぎるから・・・

しかし久住は執念によって、１位で佐藤にバトンを渡した。

佐藤は部内でもかなり遅い方だ。なのであまり期待は出来ない。

緑山高校一同

「粘れ佐藤先輩！まだ後ろついてきてないッスよ。」

佐藤はそれを聞いて安心したのかとても安定した走りを見せた。

だが、３００m地点では1人に抜かれてしまった。

そしてそのままバトンはアンカーの清水の元へ・・・・

第二十二話：記録会ＦＩＮＡＬ（前書き）

清水はマイルメンバーの希望と夢をかけていざ走る！そしてぇ・・・・

第二十二話：記録会ＦＩＮＡＬ

緑山高校の期待を背負い、今清水が佐藤からバトンを受け取った。

佐藤
「死ぬ気で走れぇ！」

緑山高校一同
「ファイト～」

清水はその声援に応え、かっ飛ばした。

直ぐ様先頭ランナーに追い付くが、先頭ランナーも黙っちゃいない。

２００ｍを通過してもいっこうに差は縮まらない。

久住
「何やってんだ清水！こんなことで終わっていいのか！」

清水はこの言葉によって消えかけた炎が再び燃え出したように感じた（比喩）

清水
「なんぞやぁ！」

清水のスピードは再び上がり始めた。

先頭ランナーもその時を待っていたかの様にスピードを上げる。

ラスト１００ｍで、ついに二人は並んだ。

緑山高校一同

「ラストファイト！」

先頭ランナー高校一同

「負けんなゴラァ！」

ラスト５０ｍ・・・にわかに清水が前に出た。

しかし清水の足は限界に達していた。

久住

「あとちょいだ、頑張れ！」

しかしこの声も疲労困憊の清水には何の意味もなさなかった。

清水はだんだんスピードダウンしてきた・・・が、目の前にはもうゴールが。

１位になりたいという執念が再び清水の心に炎を宿した。

小林・久住・佐藤

「イッケェ、清水！」

この時マイルメンバーの心が１つになった。

そして清水はゴールラインに足を踏み入れた。

純

「やった・・・一位だ。」

明

「あぁ、四人の絆が一位という奇跡を呼んだんだ」

由香

「ほんとによかったね」

由香は涙を溢した。

まぁそんなこんなで三年生の最後の戦いは幕を閉じた。

久住

「いやぁ、あん時はどうなることかと思ったぜ。」

清水

「はは、俺もお前らの声が無ければ・・・」

小林

「そんなことよりパーティーしようぜ！」

佐藤

「それいいなぁ！よし、今日は暴れるぞ！」

再びパーティーという名の戦いが始まる！

第二十三話：引退（前書き）

純は卒業していく先輩達の思いを胸に……

第二十三話：引退

陸緑山高校上部一同はパーティーをした。

パーティー中は色々大変だったけど、まぁ楽しかった。

ボーリングとかも楽しかった。

しかしそんな楽しい時の思い出に耽っている暇もなく三年の先輩は引退した。

語り・・・加藤由香

久住

「長い間ほんとにありがとな、お前ら後輩の支えがあったからこそ今の俺が要るんだと思う。鈴木！次のリーダーはお前だ。この部活をまとめていってくれ。」

鈴木

「は、はい！」

新たなキャラの二年生の鈴木はすこしギクシャクしながら言った。

まぁそんなこんなで、引退式は終わり、更には期末試験も終わり、知らぬ間に夏休みに入っていた。そしてその間に純の実力も知らぬ間に上がっているのだった。

――夏休み初日

純達は、合宿についてのミーティングをしていた。

鈴木
「まぁ今年は去年と同じ三泊四日の合宿するからなぁ。あと冬と春も合宿するから」

部員
「え～、そんなにやるのかよ！」

ミーティングは終わり、純はいつも通り、明とそれぞれの家に帰った。

――合宿前日

時はすぐたち、もう合宿前日となっていた。

その間、一年生はこの合宿のためにかなりシゴかれてかなり体力がついた。

由香
「練習チョー疲れたねぇ。」

純
「そうだね！でも合宿大丈夫かなぁ・・・・」

由香
「合宿って毎年リタイア続出みたいだから分からないよ！」

冗談を交えながら由香は言った

純

「僕リタイアしちゃうかもなぁ～、まぁ頑張ろうぜ！」

そしてその夜純は合宿の準備をしてすぐに寝た。

第二十四話：合宿その一（前書き）

ついに始まった合宿！しかし純の苦手なあの難関が行く手を阻む。

第二十四話：合宿その一

純は朝起きると今日から合宿なんだなぁという気持ちになった。

いつものように、トーストを口にくわえながら、小走りで学校へ向かう。

するといつものように由香が現れ、一緒に学校へ行った。

由香

「オハヨ！私昨日ワクワクして全然眠れなかったよぉ。」

純

「実は俺もあんまし眠れなかった。」

笑いを交えながら会話をし、やがて学校へついた。

そして学校にはすでにバスに乗っている部員のみんながいた。

鈴木部長

「おぃ、二人とも遅いぞ、何時だと思ってるんだ。」

二人は時間を見ると集合時間を5分程過ぎていた。

由香

「す、すいません！」

二人は直ぐにバスに乗った。

バスは直ぐに出発し、車内では寝るもの、音楽を聞くもの、トランプをするものもいた。

純は皆でトランプをしていた。

純
「ヨッシャー大富豪！」

まぁこんな感じのテンションで一行は合宿地についた。

バスを降りると、そこは純の住んでいる場所よりもかなり涼しかった。

明
「ここ空気ウマイし涼しいし最高だなぁ！」

純
「あぁ、もうヤバいな！」

鈴木
「よし、じゃぁまずは荷物を部屋に置いて、着替えてからここに集合だ。」

部長の一声で純はいよいよ合宿が始まるのだなぁと自覚した。

鈴木
「今日は競技場を使わない練習をする。まぁここの地形を利用しての練習をするからとりあえず俺に着いてこい。」

そう言って部長を先頭に一行は練習場所に向かった。

数分くらいして目的地に着いた。

だが、そこは純にとって最悪の場所だった。

純

「こ・・・ここで練習するんですか？」

鈴木

「そうだ、ここの急な坂を登る練習だ、足下が砂で滑りやすいから十分注意しろよ。」

純は心の中であの頃の事を思い出した。

そう、土砂が崩れて生き埋めになったあの事件。

純はあの日以来、崖や急な坂といったいかにも危なっかしい場所が苦手になったのだ。

純がこの坂に怯えている事を一番最初に察したのは・・・由香だった。

由香

「どうしたの？顔色悪いよ？」

純

「だ・・・大丈夫・・・だと思う」

純はいきなりめまいがした。

由香

「ちょっと純！顔色悪いよ！田中先生呼んでくるよ！」

由香はそう言って急いで先生を呼んできた。

田中先生
「どうしたかな葵？」

純
「実は・・・・」

純はあの日の事を全て話した（第十一話）

由香
「そんなことがあったなんて・・・・」

田中
「うむ・・・やむを得んな。」

鈴木
「いけません先生、そんなことに怯えているようなら陸上をやっている資格は無いですよ、オラ！さっさと身支度しな。」

部長は冷たく言い放った。

純
「・・・・・ゃる・・・僕やるよ。こんなとこで挫折してたら明にも勝てない！」

由香
「純・・・・」

鈴木
「陸上、ぃや、スポーツにおいて妥協は許されない、お前にはそれが分かるな？」

純
「はい！」

由香
「じゃぁ早く練習しましょ！」

そして練習をして宿に帰った。

由香
「純はもう坂道恐怖症治ったの？」

純
「まだ不安はあるけどこんなところでつまずいてる場合じゃないしね。」

この時由香には純がキラキラしているように見えた。

そしてそれと同時に由香の心の中で何かがうごめいた・・・

第二十五話：合宿その二（前書き）

純は由香の過去を知る・・・・そして・・・・ついに・・・・まさかのぉ・・・・・・

第二十五話：合宿その二

初日の夕食は豚カツだった。

一行は食堂へ向かったが明がいない。

どうやら妹の桃が心配で電話をしているみたいだ。

純は明も大変だよなぁなどとつくづく思った。

しばらくすると明が戻ってきて一緒に豚カツを食べた。

その後純達はその宿の自慢の温泉とやらに向かった。

風呂場に入るとそこは天国のような場所だった。

まぁ風呂は自慢することだけのことはあるなぁとは思った。

その後は明達とトランプをした。

ババ抜きの結果は純はビリだった。

そしていつしか眠りに着いた。

――次の日

朝は５時３０分起きだ。

純達はダラダラと起きて６時から始まる朝練に向けて着替え始めた。

着替え終わると直ぐに玄関まで行った。

鈴木
「おっ、ちゃんと時間通りに起きてこられたな。」

純
「そりゃぁ僕は時間を守るスーパー選手ですから！」

明
「スーパー選手とか・・・ダサっ。」

純
「ハハハ、まぁいいさ！」

まぁそんなこんなで朝練はジョグとストレッチで体を起こした。

体も動いてきたとこで宿舎に戻った。

その後朝食を食べていると、由香が目の前に現れた。

由香
「おはよ～純！私ピーマン食べれないから食べてよ！」

純
「あ・・あぁ、でも野菜はちゃんと食べた方が・・・」

由香
「・・・分かったわ、私食べる」

そして見事に由香はピーマンを食べたのだった。

純
「食えるじゃん！」

由香
「まぁ我慢すればね！ところで私昨日の練習で筋肉痛になっちゃった・・・・純はどう？」

純
「俺もだよ、でもインハイに行くためにはこんくらいやらないとね！」

そして立て続けに

純
「そういやさぁ、由香もインハイ目指してるの？」

由香は突然の会話の展開に思わず飲んでいた水を吹いた。

そしてその水は純の目ん玉に命中！

由香
「ご・・・ごめんなさい、突然のだったからつい・・・・」

純
「いや・・・・こっちは大丈夫・・・・」

由香
「・・・私ね・・・陸上始めたきっかけが、中学生の頃仲良かった友達

に誘われて始めたの。その友達とはいつものように全国行こうねって言われてて・・・でもその友達・・・交通事故で死んじゃったの・・・・そのせいでインハイって言葉聞く度にその子のこと思い出して・・・・」

純
「インハイが恐いの？」

由香
「決してそうじゃないけど・・・・」

純
「じゃぁその子のためにもインハイ行かないとね！」

純は励ますように言った。

その瞬間由香は吹っ切れたかのようにピーマンをむさぼった。

由香
「純って優しいね！何だかほっとしちゃった！一緒にインハイ行こうね！」

このとき純には由香がキラキラしているように見えた。

そしてこの瞬間純の心に違和感を感じた。

第二十六話：合宿その三（前書き）

純は違和感を感じながらも練習になお励む……

第二十六話：合宿その三

飯も食い終わり、いよいよ午前練が始まった。

練習メニューを聞いた明は

明

「いや～、練習キツそうだなぁ・・・・」

純も

純

「・・・・これやるのかよ・・・・」

練習は完全なスピード系の練習だった。

明

「こんな練習したら昼飯食えないよ・・・・」

純

「確かに・・・・」

鈴木

「おいおい、弱音を吐くな、今日はタイムも取って今後のリレーメンバーも決めるんだから！」

純・明

「何ぃ～？」

二人は鈴木の言葉に過剰に反応した。

鈴木
「まぁ頑張りや、自分ら（おまえら）メンバー確定じゃけん！」

鈴木が関西弁を交えつつその場を去った。

純
「・・・リレーメンバー入りたいなぁ」

明
「俺もだぜ！」

純
「今日は頑張るぞぉ！」

明
「ウオオォォ～！」

そして二人は、色々とアップをして、そのタイムトライアルに望んだ。

種目は１００ｍ！

まずは帰国子女の高校２年のセバスチャンだ。

田中先生
「よ～いドングリ！あっ、間違えた・・・よ～いドン」

セバスチャンは走った。

そして！！

「１１”４９」

セバスチャン

「ヨッシャァ！」

そしてその後もこの記録を破るものはいなかった・・・・しかし・・・・

鈴木

「うし、部長としてタイムを出してやる！」

田中先生

「よ～いドン」

鈴木は走った、何もかも捨てて・・・・

「１１”２９」

鈴木

「うしぁ！」

そして鈴木は灰になった。

部員達

「部長ォ～」

まぁその後は明が計った。

田中先生
「よ～いドンペリ・・・・じゃなかった・・・・よ～いドン」
明は走った・・・・
いつも通りに・・・・
「11”15」
純
「や・・・・やるなぁ・・・・」
すると明は
明
「俺のベストにゃ程遠いけど、まぁこれならリレーメンバー入れるっしょ。」
純
「確かに・・・・よし、頑張るぞぉ！」
そして純の番が来た。
田中先生
「よ～いドン？」
田中先生は疑問系を巧みに使った。
純
「へへへへ、ありがと。」

かくして緑山高校のリレーメンバーは・・・・

一走・セバスチャン
二走・明
三走・鈴木
四走・純

となった。

第二十七話：合宿その四（前書き）

純達はリレーメンバーの選考会を終えて一安心。だが……

第二十七話：合宿その四

午前練習も終わり、一行は昼飯を食べに宿舎へ向かった。

明
「今日の昼飯カレーだってさぁ。」

純
「まじで？じゃぁ誰が一番多く食えるか勝負しようぜ！」

セバスチャン
「ソレイイネー、ミーモヤルネ！」

鈴木
「ならば俺も・・・・」

こうして、このリレーメンバー４人によるカレー大食いバトルが開催された。

――昼

ソバスチャン
「私、セバスチャンの双子の弟に匹敵するソバスチャンが、司会を勤めていきたいと思います、はい」

流暢な日本語だ！

鈴木
「あいつ本当に日本語上手いなぁ・・・・」

セバスチャン
「ワルカッタナ」

ソバスチャン
「それでは、始めたいと思います、よ～い・・・どん！」

純は合図と同時にカレーをかけ込んだ。
しかし、明はそれを上回る早さだった。

明
「まだまだだな！」

純
「くそっ、ここまでなのか・・・」

セバスチャン
「ミーハアキラメマセーン」

純
「セバスチャン・・・お前・・・」

鈴木
「うぉりゃ～」

明
「何！部長早い・・・5皿、10皿、いや、それ以上かも知れない。」

純

「もう俺駄目だな・・・・」

セバスチャン
「ユーハマダクエル」

純
「へっ？」

セバスチャン
「マダユーサンマイシカダベテナイ、クエルネー」

純
「・・・・分かった・分かったよセバスチャン、僕食べるよ。」

セバスチャン
「ソノイキネー」

純
「うぉりゃー」

ソバスチャン
「流石は純、見事復活した！」

明
「ヤバい、負ける。」

鈴木
「ヤバい、あと25皿で追い付かれる！」

純は食った、食って食って食いまくった。

そして・・・・

ソバスチャン
「試合終了。そこまで。」

明
「はぁ食った。」

純
「腹一杯だ・・・・」

セバスチャン
「ミーモネェ」

清水
「腹痛い・・・・」

ソバスチャン
「さぁて、このカレー大食い選手権を見事に勝ち抜いたのは・・・・」

果たして誰なのか？

第二十八話：合宿その五（前書き）

カレー大食いバトルを見事に制したのは果たして誰なのかぁぁ！！

第二十八話：合宿その五

ソバスチャン
「それでは結果発表です。第一回カレー大食い対決を制したのは・・・」

みんなに緊張が走る。

そしてそれと同時にある男に一斉に光が注がれた。

ソバスチャン
「鈴木選手の勝ちぃ～！」

鈴木
「やった・・・でもお腹痛い・・・・」

そして鈴木は倒れた。

セバスチャン
「スズキ～！」

鈴木はセバスチャンの声を心の中で感じとりなんとか立ち上がった！

それと同時に歓声が巻き起こる。

鈴木
「ありがとう、ありがとう～！」

鈴木はみんなに向かって手を振った。

こうして長きに渡る昼食は幕を閉じた。

――午後

鈴木はお腹が未だにゴロゴロなっていた。

鈴木

「うっ・・・・腹痛い・・・・」

その場にひれ伏す鈴木

純

「食べすぎですよ～」

鈴木

「しかしこんなことに屈する私ではな～い！」

鈴木はなおも立ち上がる。

明は影でヤレヤレといった表情を浮かべた。

田中先生

「あぁ～えぇ～っと、今回は、走り込みするよ。」

田中がみんなに練習メニューを配ると、みんなにどよめきが・・・・

純

「今日ヤバそうだな・・・・」

明
「確かに・・・・」

セバスチャン
「アリエナ～イ！」

鈴木
「お前らしっかりしろ、こんぐらいのことは出来て当たり前だ！さぁ練習を始めるぞ！」

鈴木のテンションに押され渋々練習を開始した一行

純は３００ｍ×３Ｓ×２が一番ダルいなと思いながらも、頑張るかな、という気で満ちていた。

明も同じである。

一方由香もダルいなぁと思っていた。

由香
「練習ヤバくない？」

すると由香の親友千秋亜紀は言った。

亜紀
「ギザダルス！」

亜紀はメンドくさがり屋だから直ぐにこう言うことを言ってしまうのだ。

そして練習を暫くやって最後のメニューを残すところとなった。
しかしすでにみんなはノックアウト状態だ。
純と明以外の一年は皆リタイアしている・・・・
純
「一年は僕と明以外みんなリタイアしてる・・・・」
亜紀
「だぁ～れがリタイアですって？」
再び登場の千秋亜紀
純
「ち、千秋！お前どうして？」
亜紀
「私、体力と負けん気だけは自信あるの。だからこれくらい平気！
それに私４００m選手だしね♪♪」
由香
「私もまだいるわ！」
純は一瞬違和感を感じたが直ぐに、
純
「二人とも凄いね！」
亜紀

「でしょ～、あと純、私のことは下の名前で呼んで！名字じゃ気が狂っちゃうのよぉ。」

純
「分かったよ亜紀。まぁ取りあえず最後まで頑張ろうぜ！」

由香・亜紀
「は～い！」

そして遂に修羅場は訪れたのだった。

第二十九話：合宿その六（前書き）

地獄の練習メニューにタジタジの純、明、由香、亜紀。果たして！

第二十九話：合宿その六

明
「遂に真打ち登場だな。」

純
「あぁそうだな。」

亜紀
「こんなのちょちょいのちょいよ！」

由香
「なんか恐いわ。」

鈴木
「よぉし、今から最後のメニューをするぞ、気合い入れてけ！」

部員達
「オッス！」

そしてみんなは最大の敵へと向かっていった。

――数分後

純
「はぁはぁ、くそっ、まだ一セット目だというのに、なんだこのダメージは！」

明

「つ・・強すぎる！」

亜紀
「私も少しばかりダメージが蓄積されたわ。」

由香
「・・・・」

──数分後

純
「・・・・あと一セットか・・・・気持ちで負けたやつが消えるな・・・・」

明
「・・・・俺は負けん！」

明が吠えた。

亜紀
「私にこれだけのダメージを与えるなんて・・・・誉めてつかわすぞ！」

亜紀は支離滅裂だ！

由香
「・・・・あと・・・・一つ・・・・」

──数分後

純
「・・・・」

明
「・・・・」

亜紀
「・・・・」

由香
「・・・・終わった」

鈴木
「よぉし、今日はここまで、よく頑張ったな！」

田中
「フォッフォッフォ！」

田中先生が笑った。

――宿舎

明は電話をしていた。そう、入院中で白血病の妹からだ！

桃
「お兄ちゃん、ちゃんとご飯食べてる？」

明
「食べてるよ、お前は今日の検査どうだった？」

桃
「どうもなかったよ。」

明
「そうか・・・あと2日だけ待ってろよ。」
桃
「うん、お兄ちゃんも無理はしちゃだめだよ！」
明
「あぁ、じゃぁな。」
明は電話を切ると、みんなのいる食堂へ向かった。
純
「妹の調子どうだって？」
明
「あぁ、元気だ。」
純
「そうか・・・早く良くなるといいな。」
純は笑ながら言った。
それにつられて明も笑った。
そして晩御飯はステーキだ。
亜紀
「私の大好物じゃなぁ～い！」

亜紀はテーブルに身を乗り出し叫んだ。

由香

「もぉ、亜紀行儀悪いよ。」

亜紀

「だって肉よ！に・く！」

亜紀は肉好きだった。

由香が席に座ると、その隣には純がいた。

純

「よっ！由香・・・と亜紀！」

その時由香に衝撃が走った。

第三十話：合宿その七（前書き）

由香は純に衝撃を受ける。そしてあの謎の事実が明かに……

第三十話：合宿その七

由香に衝撃が走った。

なぜなら・・・・

純のチャックが全開だからだ！！！！

純ったらなにチャック全開でうろうろしてんのよ～と由香は思った。

由香はこの時意地でも純にチャックのことを知らせてやると決心した。

まずはいかに純にチャックのことを伝えるかだ・・・・

そうだ！チャックという言葉に意識を集中させればいいんだ！

そうと決まれば・・・・

由香

「ねぇ純、チャックって何でチャックって名前なんだろう？」

純

「はっ？由香いきなり何言い出すんだよ。まさか今日の練習で頭がいかれたんじゃ・・・・」

由香

「違うわ！私はただ純のチャ・・・・」

はっ！私としたことが！うっかり純のチャックのことをみんなに公表するとこだったわ！

由香が恥ずかしさのあまり下を向いていると・・・・

純

「由香大丈夫か？」

純が顔を覗いてきた。

この時由香の心の中で何かがうごめいた。

由香は、あれ？こんなこと前にもあったような・・・・

由香はこのうごめきを止めるべく、着ているシャツを引っ掻き回した。

すると・・・・

由香

「キャー！蛙よ！」

由香のシャツの中には蛙が潜んでいた。

純

「ハハハ！由香が蛙嫌いとは知らなかったなぁ！」

由香

「もう・・・・恥ずかしい・・・・」

しかし見事由香のうごめきは取れたのだった。

そして純も思った。

前にも感じたこの違和感は・・・髪の毛が伸びてたからか！と・・・

しかし二人は思う。

以前のうごめき&違和感と今のうごめき&違和感はおんなじものなのだろうか・・・と。

そうこう考えていると・・・

明

「あっ！純チャック全開だ！ダッセェ～！」

クラスに一人はいる異常にテンションが高い明（一話参照）の一言。

見事純はみんなの恥さらしとなった。

そしてこの男も・・・

セバスチャン

「オー、ミーモチャックゼンカイネー！」

ソバスチャン

「兄貴格好悪い・・・」

第三十一話：合宿その八（前書き）

ついに合宿も折り返し地点に突入。三日目の練習は・・・本編を見てのお楽しみ♪♪

第三十一話：合宿その八

ついに合宿は三日目の朝。

あいにくの曇りだったが、陸上部の部員達のテンションはそれ以上に曇りがちだった。

純

「はぁ～、足のあちこちが筋肉痛だ・・・・」

明

「朝練ダリィ・・・・」

純

「・・・・やべ！もうこんな時間！早く朝練行かないと。」

こうして二人は嫌々朝練をしてなんとかダルい体を起こした。

朝飯も食べ終わり、いよいよ午前練習だ！

純

「今日の練習なんだろう・・・・」

明

「さぁ、ただ長い距離は懲り懲りだぜ。」

そしてメニュー発表。

鈴木

「え～、今日の午前練習は、スタート練習をしようと思う。」

この瞬間、純の顔がほころんだ。

純

「よし、スタートなら俺得意だし、あまり肺にこないかららくだ！」

明

「・・・しかし、午後は辛いだろうな・・・」

純

「まぁとりあえず目先のことだけ考えようぜ。」

明

「そうだな。」

そして練習は始まった。

アップをして、流しをし終わると、いよいよスタートだ。

純は直ぐ様スタート位置についた。

スタブロを足にかけて感触を確かめる。

純

「くぅ～、スタート久しぶりだぜ。」

そして純は色々な思いを胸にスタートをした。

しかし純が走り終わると・・・

純
「・・・・あり？スタートがうまく・・・・いかない？」
そう、純はいつものような素晴らしいスタートが出来なかったのだ。
純
「どうしてだ？歩幅はあってたし、タイミングも・・・・」
セバスチャン
「ユーハアシツカレテルネー、ダカライツモヨリスタートダメネ。」
純
「俺の足に限界がきてるってことか・・・・セバスチャン先輩、そのことについてもっと詳しくお願いします！」
セバスチャン
「分かったね。」
純はセバスチャンからいろいろなことを聞いた。
純
「そうか、分かりました！ありがとうございます！」
そういってセバスチャンに会釈した。
純
「よぅし、今度こそ！」
純はスタブロに足をかけて、何度もスタートをイメージした。

そして純はスタート！

純は懸命に腕を降った、そう、純に足りなかったものは腕ふりだったのだ。

純は今まで体だけでスタートをしていたため、体力をすぐに使いきり、後半は伸び悩んでいた。

しかし、今は違う。

純はセバスチャンに感謝したのだった。

こうして午前練習は終わった。

昼は競技場で弁当を食べた。

しかしその後ろに忍び寄る影が・・・・

第三十二話：合宿その九（前書き）

三日目に突入した合宿。

果たして……

第三十二話：合宿その九

緑山高校に忍び寄る影、それは？

純
「あ・・・あれは！？」

由香
「あのジャージ・・・もしかして黒山高校の」

田中先生
「わしが呼んどいたんじゃ。黒山高校の他に白山高校と赤山高校も呼んどいたぞ。」

鈴木
「そうか、午後の練習は合同練習か！」

すると一人の男が明のもとに寄ってきた。

塚地
「よぉ明、元気か！」

明
「よぉ俊、久しぶりだな。お前黒山高校だったんだ。」

寺井
「俺は白山高校だぜ。」

明

「洋、お前もいたのか？」

鳥居

「俺は赤山高校だ、明！」

明

「賢まで！」

純

「明、この人達は・・・・」

明

「あぁ紹介が遅れたな、この三人は中学時代に俺と四継メンバーだったんだ。」

純

「へぇ、じゃぁ会うのは久しぶりなんだね！」

明

「あぁ、なんか嬉しいぜ。」

田中先生

「さぁて、ノロケ話もここら辺にして本題に入ろうかのぉ。」

純

「練習って何するんですか？」

田中先生

「ん～、そうじゃな、とりあえず、リレーかのぅ・・・・」

明
「まじで？来たぜぇ！」

田中先生
「緑山高校からは・・・・・このオーダーじゃな。」

一走：純
二走：鈴木
三走：セバスチャン
四走：明

明
「ってかよく考えたら、俺らバトン練習してないじゃん！」

田中先生
「お前らなら生まれつきの野性的勘で出来るはずじゃ。」

セバスチャン
「ミーモデキルトオモウネー」

こうして四継リレーの火蓋は切って落とされることになった。
ちなみにインコースから、赤山、黒山、白山、緑山、である。

田中先生
「位置について、よ～い」
パァン、と雷官（ピストル）がなった。
純は勢いよくスタート！

最初はかなり上手く走れた。

しかし・・・・

純の耳元を一つの風が通りすぎた。

そして純の視界に入ったのは・・・・白山高校だ！

純はクソッ！と思ってピッチを上げるが追い付かない。

田中先生

「ふむ、純はコーナリング技術が欠けとおるのぉ。」

純は黒山高校にも抜かれ、バトンを鈴木に渡した。

その時の鈴木は前の二人を捕らえるかのような凄い形相をした走る猛獣のようだった。

第三十三話：合宿その十（前書き）

ついに始まった四継リレー。果たして結末は……

第三十三話：合宿その十

ソバスチャン
「鈴木、そこからがお前の見せどころだぞ！！」

ベンチからリレーを眺めるソバスチャンはそう言った。

そして一方の鈴木はオーラを纏い、凄まじいピッチでジリジリと黒山と白山を追い詰めた。

田中先生
「ふむ、鈴木がここで二人を抜かないと、セバスチャンが一番アウトコースだから、レース展開がキツくなるのぉ、ここは鈴木の爆走にかけるしかないのぉ」

そして鈴木が５０ｍを通過したあたりで、完全なる鈴木テリトリーが完成した。

純
「あれが鈴木先輩・・・なんて速さだ・・・」

セバスチャン
「チョッ、スズキソンナニトバシタラバトンアワナイネ」

そして７０ｍ地点で二人を抜きトップへと躍り出た。

純
「す・・・凄い・・・それに比べて僕はまだまだだな・・・」

そして鈴木は更に差を伸ばしてセバスチャンにバトンを渡した。
鈴木が練習よりも速いスピードで走っていてバトンを合わせるのは困難な事だが、セバスチャンのバトンテクでジャストミートだった。

鈴木
「チャンスを作った、いけセバスチャン！」

セバスチャンは見事なコーナリング裁きをした。しかし黒山と白山、さらには赤山もインから入ってきた。

ソバスチャン
「兄貴、そこからが兄貴の力の見せどころだぜ」

そうソバスチャンが言い放った瞬間、セバスチャンの体がピクリと動いた。

そして次の瞬間、ついにそれは作動した。

そうコーナーを使った加速である。

しかし、ただの加速と違い、セバスチャンのやつは、半端ないぐらいに速いのだ。

明
「いいぜぇ、セバスチャン先輩、練習通りの速さだ。」

他の学校との差は３ｍ位のところでバトンは明に渡った。

純

「行けぇ明！」

明は最初の２０ｍですでにほぼトップスピードになり、差をさらに広げた。

純

「よし、いいぞ明」

田中先生

「……」

そして明は５０ｍ地点でもトップのまま爆走を続けた。

明は、あと少しだと思いさらに気合いを入れた。

残り４０ｍ…３０…２０…

そして……明が勝ちを確信した瞬間だった。

耳元を通り抜ける風、そして目に入る３つの学校。

そしてレースは終わった。

明はゴール地点でたたずむことしか出来なかった。

第三十四話：合宿その十一（前書き）

明はリレーでごぼう抜きされたことにひどく傷つく……

第三十四話：合宿その十一

夜、明は田中先生に呼び出された。

そう、リレーの事だ。

田中先生「明、お前がなぜあの場面で抜かれたか分かるかのぉ。」

明「・・・・いいえ、俺には全く・・・・。」

田中先生「そうか・・・・では教えよう。」

明は息を呑んだ。

田中先生「まず明、お前の走りは、他の人より加速仕切るのが早いんじゃ。」

明「！？！？」

田中先生「要するにトップスピードが３０ｍ位のところなんじゃ。」

明「早くトップスピードに行くってことですね？それっていいことじゃ無いんですか？」

田中先生「いいや、そうでもない。トップスピードに入るのが早いと、スピードダウンするのが早いんじゃ。」

黙りコクる明

田中先生「まぁ簡単に言えば、明は全然前傾が出来てないということじゃ！」

明「・・・・」

田中先生「前傾するのをもう少し長くすれば、お前の走りはおのずと変わっていく。明日からはこれを意識するのじゃ。」

明「はい、分かりました。ありがとうございます。」

明は部屋を出ると、みんなのいる食堂へと向かった。

明が食堂へ入ると、そこにはスペアリブをほぉばる千秋亜紀の姿があった。

明「亜紀、相変わらずだな。」

亜紀「私の胃袋は肉で出来てるからね。ほら明も食べなよ！」

そう言うと亜紀は明の皿にスペアリブを山程盛り付けた。

明「こ・・こんなに食えないよ・・・・」

亜紀「大の男が何言ってんの？こんくらい当然でしょ！」

明は真顔でそう言う亜紀に思わず笑ってしまった。

明「ハハハ、お前面白いな！よぉし、食べるぞ！」

亜紀「そうこなくっちゃ！ようし、私ももう１０個食べるわよ！」

明「おぃおぃ、程々にしろよ。」

こうして明に笑みが戻った。

そして・・・・

鈴木「よぅし、今日は花火大会をするぞ。八時にロビーに集合だ！」

一同「ヨッシャ～！」

しかし、この時事件が起こる事など誰も知るよしもなかった。

第三十五話：合宿その十二～ＨＡＮＡＢＩ～（前書き）

合宿三日目のキツい練習を乗り越え、息抜きに花火大会をやることに！

第三十五話：合宿その十二～ＨＡＮＡＢＩ～

陸上部一行は、花火大会の集合場所、ロビーにいた。

鈴木「花火は持ったかぁ～？」

一同「オー！」

鈴木「バケツと水は持ったかぁ～？」

一同「オー！」

鈴木「チャッカマンは持ったかぁ～？」

一同「オー！」

鈴木「それじゃぁ行くぞぉ～！」

一同「オー！」

こうして一同は花火をするために広場へと直行した。

――数分後

鈴木「ようし着いたぞ！

明「よぅし、ロウソクに点火だ！」

こうして花火大会は始まった。

そして純と明は線香花火バトルを始めた。

二人の花火に火が点される。

スタート！

純「イッケェ～！！」

明「負けるかぁ～！」

ほとばしる火花。もはやどちらが勝ってもおかしくない状況だった。

そして・・・・

明の火種が落ちた。そう、これは明の負けを意味する。

純「いぇ～い、勝ったぜぃ！」

明「ま・・負けた・・・・」

明は落ち込み、へなへなとその場に座り込んだ。

亜紀「全くあんたは負けたぐらいでだらしないわねぇ。」

突然亜紀が一喝した。

そして亜紀が明に手をのばす。

明「亜紀・・・・俺を励ましてくれるのか・・・・ありがとう」

明は亜紀の手をとった。

しかし、この時二人の頬が赤くなった。

亜紀と明は恥ずかしさのあまり、手を離した。

明「ご‥ごめん‥‥」

亜紀「べ‥‥べつに！」

明かに焦る二人。

そしてこの状況を見ていたのは‥‥由香だ！

由香「ははぁん、なるほどね。これは面白そうだわ。」

由香は一人微笑を浮かべるのだった。

そして花火大会も終盤を向かえ、打上げ花火をするだけとなった。

鈴木が点火のカウントダウンを始める。

鈴木「3‥2‥1！」

ヒュ〜〜‥‥‥パァン！

見事花火は輝きを纏い花ひらいた。

そしてこの時部員一同はひとつとなり、この厳しい合宿も残り1日

だということを実感したのだった。

皆は宿に帰り、最後の日に向けて、静かに眠りについた。

第三十六話：合宿その十三（前書き）

ついに合宿も最終日に突入！果たして最後の練習メニューは……

第三十六話：合宿その十三

――合宿最終日

純「ふわぁぁぁ～、眠ぃ～。」

明「朝練めんどいなぁ・・・でも今日で最後だ！」

二人がそう話していると、鈴木が突然二人の間に入ってきた。

鈴木「ふふふ、たしかに今日は最後だが、緑山高校名物階段３６９０段うさぎ跳があることを忘れちゃいけないよ。」

そう、緑山高校は毎年合宿最終日に、宿舎の近くにある長い階段でうさぎ跳をするのだ。

セバスチャン「アレシヌカラキライネー。」

ソバスチャン「だけど身体を鍛えるにはもってこいですよ。」

純「まぁ要するに辛いってことですね・・・」

明「純、一緒に頑張ろうぜ！」

純「おぅ、そうだな！」

朝練は終わり朝御飯の時間になった。

由香「なんかぁ、噂によるとあの階段３６９０段で毎年八割は途中

でリタイアするらしいよ。それでもって登りきった人は必ずリレーメンバーやスタメン入りできるらしいよ。」

純「へぇ～、じゃぁ頑張って登り切らないとなぁ・・・・」

明「なぁに、俺らなら大丈夫だよ！」

亜紀「そうね、私達に出来ないことは無いわ！」

こうしてみんなの意志は高まっていった。

そして練習時間になった。

鈴木「よぅし、じゃぁグループに別れて五分ごとにここを出るぞ！これがグループ表だ！」

鈴木はどこからともなくグループ表を出した。

Aグループ：明、亜紀、ソバスチャン、その他

Bグループ：由香、セバスチャン、鈴木、その他

Cグループ：純、その他

純「げっ！一番最後かよ・・・・」

明「俺は最初のグループかぁ・・・・」

亜紀「私もだよ！」

由香「私は二組目ね！」

そして、運命の時間が始まった。

田中「Ａグループ位置についてよぅい、スタート！」

みんなは一斉に駆け出していった。

第三十七話：合宿その十四（前書き）

遂に始まる最後の練習、みんなを待ち受ける最後の試練をみんなは乗り越えられるのか？

第三十七話：合宿その十四

Aグループは一斉にスタートした。

純「頑張れ明ぁ～！」

みんなピョンピョン跳んでいる。

――五分後

Bグループも一斉にスタート。

純「由香頑張れぇ～～！」

由香もピョンピョン跳んでいる。

そして純の番・・・・

スタート！

純はピョンピョン跳んでいる・・・・この組では一位になるぜ！と思っていると・・・・

純を抜き去る一人の少年がいた。

一年生・・・・名取浩介。

純「名取君・・・・いつのまにあんなに力を付けたんだ・・・・」

名取「あのさ、葵君、僕君には負けないから。」

いきなりの宣戦布告。

名取はそういうと純より先に上へと登っていった。

純「アンニャロー。」

純もスピードをあげ、二人はBグループの下位者をスルリと抜いていった。

二人の攻防はなおも続く。

名取「なかなかやるな・・・・」

純「名取君こそ！」

名取「・・・・浩介でいいよ。」

純「へ？」

名取「へ？じゃなくて・・・・名前だよ・・・・」

純「あぁそういうことか！じゃぁ俺も純でいいよ！」

いつしか二人には友情が芽生えていた。

――頂上

明「はぁはぁ、なかなかやるな・・・・ソバスチャン先輩！」

ソバスチャン「いやぁ、階段登りなら誰にも負けませんよ。」

明はソバスチャンに僅差で負けていた。

明「さぁてと、Ｂグループはだれが一位かな？」

ソバスチャン「あそこは兄貴と鈴木がいるからなぁ・・・どっちが勝つか・・・」

暫くゴール地点を見ていると・・・

明「あれは！」

ソバスチャン「間違いない。」

明・ソバスチャン「部長だ！」

一位は我らが部長の鈴木だった。

そして二位がセバスチャン。

しかし予想外だったのが、三位は女子の由香だった。

明「残るはＣグループか・・・純、お前が当然一位なんだろうな。」

鈴木「いや、あのグループには名取という、中学時代４００ｍで都の決勝に残ったやつがいる。純とはかなりの接戦になるかもな・・・」

やがてＣグループの先頭が見えてきた。

セバスチャン「アレハ！」

鈴木「なんちゅうやつらじゃ。」

明「まさか・・・・」

みんなが見た光景は、二人がほぼ同時にゴール手前まで来ていた。

純「うぉりゃゃゃ！」

浩介「どりゃゃゃゃ！」

果たしてどちらが勝つのか！

第三十八話：合宿～ｅｐｉｌｏｇｕｅ～（前書き）

合宿がついに全てが終わる！
感動の合宿編クライマックス！！！

第三十八話：合宿～ｅｐｉｌｏｇｕｅ～

果たして勝つのは純と浩介、どっちか？

明「いっけぇ～純！」

そして・・・ゴール！

一着は・・・・・純と浩介・・・同着だ！

純「はぁはぁ、疲れた。」

浩介「右に同じく・・・」

そして二人は顔を見合せ突然笑いだした。

明「何笑ってんだ？」

純「ん？ぃやぁ、陸上楽しいなぁって思ってな。」

すると明も微笑した。

こうして合宿は幕を閉じた。

一行は昼飯を食い、荷物をまとめ、バスに乗り、脱け殻のように深い眠りに着いた。

そして、

鈴木「さぁ、学校に着いたぞ。みんな起きろ！」

鈴木の声で起きたみんなの顔は、ただただボ～～ッとしていた。

鈴木「ほら、シャキッとしろ。」

セバスチャン「アレ、モウツイタノ？」

鈴木「そうだ、ほらみんなもバスから出て。」

鈴木は一人一人を起こし、バスから降ろさせた。

田中先生「よぅし、では解散じゃ！」

そしてその帰り道、由香と二人で帰る純の姿があった。

純「やぁぁ、合宿辛かったなぁ・・・・」

由香「そうね、私今日の階段途中棄権しちゃったし・・・・まだまだ体力不足ね！」

純「まぁ何はともあれ、明日は休みだから寝るぞー！」

由香「もう、寝ることしか考えてないんだから。」

二人は笑いながら各々の帰路に着いた。

そう、これから起こる事も知らず・・・・

――明宅

明に一つの電話が掛かってきた。

明

「もしもし、どちら様ですか？」

謎の男

「君が桃ちゃんのお兄さんかね？」

明

「はぁ・・・・そうですが・・・・何かようですか？」

謎の男

「実は・・・・・・・」

明

「本当ですか！それでしたら喜んで！」

謎の男

「そうかそうか、俺の名前は丹羽、また後程電話する。」

これが全ての始まりだった。

第三十九話：明の決断（前書き）

合宿を無事終えた緑山高校は……

そして明は……

第三十九話：明の決断

純は、家に一人でいた。

純「しゃぁぁ、今日は合宿の次の日ということもあり休みだし、羽を伸ばすか！」

とりあえず純は手当たり次第にメールを送った。

『今日どっかで遊ばね？』

まず返信が返ってきたのは・・・剣菱だ！

『ごめ～ん、今沖縄いるんだ（≧ε≦）』

またの機会にぃ（ ３ ）』

純は剣菱の性格に似合わずよく絵文字を使うなぁと思った。

こんな感じで内田、遠藤にも断られ、結局明と遊ぶことにした。

遊び場所は○○駅前だ！

純「カラオケ行こうぜ！」

明「よぉし、純には得点で負けないぜ。」

こうして二人は楽しい時間を過ごした。

日も沈みかけ、そろそろ解散ムードが漂った時、明は純に言った。

明「俺さぁ、鹿児島に一年間だけ転校する事になるかもしれないんだ。」

純はいきなりの事に飲んでいたオレンジジュースを吹き出し、むせかえった。

純「ゴホッ・・・本当か？なんでまた急に。」

明「実はな・・・妹の白血病を治せる凄腕の医者を見付けたんだ・・・それで・・・」

純「良かったじゃん！まぁ・・・純と陸上出来ないのは残念だけど・・・高三の総体には戻ってくるんだろ？それまで待ってるぜ！」

明「純・・・よし、決めた、来週には鹿児島に行くよ。それと・・・来年のインターハイで会えたら会おうな！」

純「そうだな。」

二人は遊びまくり帰路に着いた。

――翌日

田中先生「そうか、明は鹿児島に行くのか・・・」

明「突然スイマセン。高3になったら戻ってきます。」

そして放課後、部員のみんなにもその事を伝えた。

鈴木「そうか、寂しくなるな・・・」

セバスチャン「アキラト、リレーデキナイネー」

明「スイマセン先輩達。」

亜紀「・・・・・ちゃんと来年のこの時期までには戻ってきなさいよね。」

明「あぁ、分かってる。」

こうして全てを伝えた明。

明が鹿児島に行くまで残り6日となった。

第四十話：残された時間（前書き）

明が鹿児島へ行くまであと６日。亜紀の心情の変化を見逃すな！！

第四十話：残された時間

明が鹿児島に行くまで残り6日となった。

田中先生「ふぅむ・・・明が抜けるとなると、誰か他にリレーメンバーを入れんとのぉ」

この田中先生の声にリレーメンバーではない人達が食いついた。

ソバスチャン「では私をリレーメンバーに！」

浩介「いや、俺がやるぜ！」

その他「俺らも～～」

田中「まぁ待て、リレーメンバーは、次の新人大会には時間があるから、また今度にしよう。」

浩介「ちぇっ。」

由香「男子はリレーメンバーに入るのに必死だね。」

由香は部友の沼田真美に言った

真美「そうね、でも明くんが抜けた穴は大きいわねぇ～」

由香「そうそう、明ねぇ・・・亜紀、明の鹿児島行き止めなくていいの？」

亜紀「べ、べつに、私には関係ないし！」

由香「またまたぁ、本当は明のことが好きなんじゃないの？」

真美「ええぇ！そうなの？」

亜紀「ちょっ、由香ぁ、何言っちゃってるの！」

亜紀はかなり動揺した。

由香「やっぱり・・・亜紀、自分に素直になった方がいいよ。後で一生後悔することになるのは亜紀なんだから。」

亜紀「そ、そんなぁ・・・」

そうこうしているうちに、明の鹿児島行きまで残り5日となった。

この時、純達は明のドッキリ送迎会を開く事を考えていた。

純「送迎会何やる？」

由香「ふーむ、ボーリングは？」

亜紀「ダメダメ、カラオケとかの方が楽しいぁ！」

真美「・・・亜紀ちゃん家でパーティーは？」

由香「それいいぢゃん！亜紀ん家お屋敷だし！」

亜紀「ちょっ、勝手に決めないで！」

由香「良いじゃない！チャンスなんだから。」

純「チャンスって何が？」

真美「いやぃや、こっちの話！」

純「なんかあやしいけど、まぁいいや！じゃぁ遊ぶ日は3日後の午後一時からで！」

みんな「はぁ～い！」

純は家に帰ると、突然明がいなくなるという事実にかられ、ベッドに倒れた。

第四十一話：亜紀ん家（前書き）

明の鹿児島行きが近づく中純、そして亜紀は。。。。。。。。

第四十一話：亜紀ん家

明が鹿児島へ行くまであと４日

純は目覚めると、布団の中にうずくまっていた。

純「あれ・・・俺いつの間に家に・・・」

咲「あんた昨日家に着いたかと思ったらリビングで爆睡してたのよ。ホント純の部屋に運ぶの苦労したんだから。」

純「悪いな姉貴、この仮はいつか返すよ。」

咲「やった♪♪なんか食べに連れていってもらお。」

純「調子にのるな！」

そして純は部活のために、学校へ行った。

学校に着くとそこには明がいる。

明「よぉ純、明後日亜紀ん家でパーティーするんだよな？そこでお願いなんだけど・・・・・桃も連れてっていいか？」

純「別にいいぜ！」

明「助かるぜ、桃にも最後にここでの思い出作らせてやりたかったからさ・・・・」

純「そうだよなぁ・・・」

練習が終わり、純は桃のことを由香たちに伝えた。

由香「へぇ、明って妹いたんだぁ。」

亜紀「多分超可愛いんだろうなぁ。」

由香「まぁ明の妹だからねぇ。」

由香は亜紀の方を見てにやにやしながら言った。

そして時はたち、パーティー当日。

明が鹿児島へ行くまであと2日。

一行は亜紀の大きな家の前の門に集合していた。

明「いやぁ、なんかこの家、よくドラマとかで出てくる金持ちの家みたいにでかいなぁ・・・」

由香「そうねぇ、亜紀と結婚できる男の人は幸せね～」

由香、ここぞとばかりに亜紀をアピール。

すると亜紀が家の中から出てきた。

亜紀「どうぞ、上がってください。」

純「よし、入るぞ・・・って何で姉貴がいんの！」

咲「私だってメシ食べたいもん。」

純「けっ、この前まで拒食症だったくせに・・・・」

咲「はぁ？関係ないでしょ！」

純「まぁいいけど・・・・」

こうしてパーティーは幕を開けた。

第四十二話：ご馳走（前書き）

亜紀の家・・・・そこにはとてもとても大きなテーブルがあった。。。。

第四十二話：ご馳走

亜紀「ようこそ我が家へ！」

亜紀の家へ入ると、玄関では大勢のメイドが横一列に並んでいた。

メイド「お帰りなさいませご主人様」

この時一瞬だけ純を含む殆んどの人はメイドカフェかと思った。

そして一同が部屋に入ると、輝くシャンデリア、テーブルいっぱいに乗っている食べ物、大きなスクリーン画面など、かなりの豪華さを醸しだしていた。

明「す、すげぇ・・・」

由香「私も二度目だけどやっぱり凄いわぁ。」

純「よし、早速飯だぁ！」

純はマイ箸をもってテーブルに直行！

咲「あっ純待って、このタッパに食べ物詰め込んどいて、明日のご飯にするから。」

そういうと咲は特大タッパを純に渡した。

純「姉貴準備良すぎ・・・まぁいっか！」

姉弟は一気にタッパに食べ物を詰め込みまくった。

桃「この肉美味しい～♪」

明「ほんとか、俺も。」

明も肉を食う。

そして笑う。

亜紀は明の笑う姿が見れなくなる事を考えると悲しくなった。

由香「亜紀も食べよ！」

由香は亜紀を励ますように言った。

亜紀「そだね、よっしゃぁ肉ぅ～！」

亜紀は元気になった。

そしてパーティーは最高潮のまま、ビンゴ大会へと発展していった。

亜紀の家の自慢の大きなスクリーン画面を使い、いざスタート！

亜紀「一位には素敵な商品があります！」

亜紀が指さす方向には、ハワイ旅行6泊7日のチケットがある。

純「こ・・・これは！」

咲「どうやら勝つしか無いようね。」

咲の目にはハワイしか見えていない。

桃「私も頑張るー！」

こうしてビンゴ大会は始まった。

第四十三話：ビンゴでＧｏ！（前書き）

遂に始まった運命のビンゴ大会。果たして勝つのは誰だ！！！！！！！

第四十三話：ビンゴでＧｏ！

ビンゴ大会は始まり、最初の数字がスクリーンに写しだされた。

ちなみに数字は１～７４まである。

『９』

明「よし、角にあった！」

由香「あっ、私もあった」

純「ちっ、なかった・・・・」

――十分後

なんと最初のリーチは咲だった。

咲「ハワイ目前よ！」

純「・・・・・・」

しかし次の回で明と由香もリーチとなる。

由香「やっと盛り上がってきたわ。」

明「３６出ろ～」

そしてまた二回後は、咲がＷリーチ、明と由香と亜紀がリーチとな

った。

真美「なかなか数字当たらない・・・・」

そして次の回

『３』

桃「あっ、いきなりトリプルリーチだ、やった！」

咲「ぬぁあにぃ？」

真美「あっ私も一応リーチ」

純「ぬぉおおー、僕だけリーチにもなってない・・・・・・」

由香「あんたとことん運が悪いのね。」

ちなみに・・・・

咲：６１、６５

明：３６

桃：１２、２５、７３

由香：５５

真美：６２

亜紀：４６

が出ればビンゴである。

そして局面は最終章へ。

みんながＷリーチなどになる中、純だけがリーチにすらならなかっ

た。

純「くそっ、なんでリーチにならないんだ！」

咲「純、肩の力を抜きなさい。」

純「そうだ、落ち着け、まだチャンスはある・・・・・」

『12』

桃「やった、ビンゴ♪♪」

純の顔は凍てついた。

咲「あっ！こら純、あんたのせいでビンゴにならなかったんだからね！」

純「そりゃないよ・・・・」

明「それにしても桃、よくやったな、だけど・・・・」

明は口ごもった。

桃「どうしたの？」

明「あれだ・・・非常に言いにくいんだが・・・俺らは鹿児島に行くわけだから、ハワイには行けないんだ。」

桃「・・・そっかぁ、じゃぁ大人になったら行こ！」

明「あぁ約束だ。」

二人は指切りをした。

明「てことで、俺らはビンゴを辞退する。」

咲「じゃぁ私達にもハワイ行きのチャンスがまだあるのね！」

と思ったが・・・・

結局亜紀がビンゴになり、亜紀のハワイ行きは決定した。

第四十四話：ザ☆ボーリング（前書き）

遂に明との送別会もあとわずか！！最後にボーリングをやるが・・・

・

第四十四話：ザ☆ボーリング

パーティーは最高潮！

いよいよ最後のボーリング大会へと入った。

1レーン：亜紀、明、桃、真美

2レーン：純、由香、咲、亜紀の執事

で行われた。

執事「お嬢様、大事なお友達の送別会に私のような者が一緒にボーリングしてもよろしいのですか？」

亜紀「人は多い方が楽しいから構いやしないよ。」

執事「ではお言葉に甘えて。」

まずは一巡目だ。

明の一投目。

亜紀「頑張ってぇ～」

明「任せとけ！」

明は助走を初め、投げた。

そのボールはとてつもない回転をしていた。

真美「なにあの回転？この世のものとは思えないわ！」

桃「すっご～い！」

しかしそのボールは、スピンが強すぎて、ガーターになった。

亜紀「ダッサ！」

明「しょ、しょーがねぇだろ！ボーリングとかガーターしか取ったこと無いんだから・・・」

亜紀「じゃぁ私が教えてあげるよ。」

明「あぁ頼むよ。」

一方隣のレーン

由香「ねぇ純、亜紀と明いい感じじゃない？」

純「へっ？あぁ、仲良いよな。」

由香「そういうことじゃなくて・・・はぁぁぁ、これだから男ってやつは。」

咲「男ってやつは。」

純「姉貴は繰り返して言わなくていいよ！」

執事「そうですか、お嬢様にも春がやってまいりましたか。」

由香「あっ、さすが執事！よく分かってるじゃん。」

執事「お嬢様のことなら何でも分かりますよ。おやおや、次は私の番ですね。」

執事は助走を付け、ボールを投げた。

そのボールはキレイに曲線を描き、一番ピンに吸い寄せられるようにしてドンピシャでストライクを取った。

純「なんだあのきれいなボールは！」

由香「上手すぎる！」

咲「さすが執事といったところね、だけど私がボーリング女王だと言うことを忘れないで！」

そういうと咲は勢いよく助走し、ボールを投げた。

そして執事と同じくキレイな曲線を描き、ストライクを取った！

咲「執事、あなたの好きにはさせない、私と勝負よ！」

執事「ほほぅ、私にボーリングにおいて勝とうとする輩が未だにいるとは・・・よろしい、その勝負、受けてたちましょう！」

二人からは熱い火花が散っていた。

純・由香「どうなっちゃうの～！」

第四十五話：決闘の結末（前書き）

ボーリングもいよいよおおずめ！！！！！そして明との別れの時間は近い！！

第四十五話：決闘の結末

咲「行くわよ！それ。」

咲の投げたボールは綺麗な弧を描き見事ストライク。

執事「ほほぅ、ならば私も」

執事はそう言うと、またもやストライクを出した。

純「・・・今の執事の投球フォーム・・・・」

由香「純のお姉さんと同じフォーム・・・コピーしたの？」

純「ちっ、姉貴なんて雑魚に等しいって事か！」

咲「・・・執事さん、私を見下そうと構いませんが、最後に笑うのはこの私ですよ。」

純「なんかこの二人怖い・・・・」

一方のグループは・・・

明「とりゃぁ！」

ボールは曲がりに曲がりに、ヘッドピンに当たらず、惜しくも８本倒れた。

明「ちっ、残っちまったか・・・」

亜紀「が、頑張れ～！」

明「よ、よぉし、とぉ！」

明は力みすぎたせいか、ボールはガーターとなってしまった。

桃「お、おしい！」

明「くそぉー！」

真美「お疲れ、ドンマイ。」

亜紀「あっ、次は私の番か。」

亜紀がレーンに立つと、真美は亜紀に聞こえないように明に質問をした。

真美「あんた、亜紀の事どう思ってんの？」

明「べ、別にどうも・・・」

真美「言っとくけど、亜紀は今日あんたにコクるつもりだよ。」

明「・・・」

真美「まっ、頑張りなさい！」

真美は明の背中を強く叩いた。

そして対する咲と執事の戦いは今１０レーンの３回目で、咲が９本倒せば同点、ストライクで完全勝利という最後の戦いが繰り広げられていた。

咲は色々な回想をし、その一球に全てをかけた。

咲がボールを投げた。

果たして……

「カランカラン！」

ボーリング場に音が響く。

咲は前を見ると、一本のそびえ立つピンがあった。

咲「…同点ね」

執事「そのようですね」

その瞬間二人はかたく握手をした。

こうしてボーリング大会は幕をおろした。

第四十六話：さよならは言わない（前書き）

遂に終わりを迎えたパーティ！！亜紀の運命やいかに？？？？

第四十六話：さよならは言わない

亜紀宅で行われたパーティーは終演を向かえようとしていた。

亜紀「明、少し話があるんだけど・・・・」

明「なんだい？」

亜紀「あの・・・・えっと・・・・その・・・・」

その会話をでかい植木鉢の陰で見ていたのは由香と真美だった。

由香「もぅ少し近づかないと会話が聞こえないわ！」

真美「じれったいぁ。」

純「全くだ。」

由香「そうそう・・・・ってなんで純がここにいるの！」

純「いちゃ悪いか！」

真美「あんた背後霊のようにいきなり現れるわね・・・・」

純「人をおばけ扱いするな！」

由香「しー。静かに。見つかるわよ。」

三人は黙って見守った。

亜紀「あのね明、私あなたの事が、す、す、すす・・・」

明「へ？何だって？」

亜紀「す、スライムに似てるなぁって思ったんだ！ハハハ。」

明「なんじゃそりゃぁ。」

亜紀「ハハハハハ。」

【私の意気地無し・・・】

真美「やっぱり無理だったか・・・」

由香「こればっかりはどうにもならないわ・・・」

そしてそのままパーティーは終焉を向かえた。

明「今日は俺の為にありがとな。」

純「あぁ。あっ、俺等明が鹿児島行く日は部活だから今日でお別れだ。」

明は首を横に振った。

明「別れだなんて、また会う機会があるんだから、そう言う時にさよならは言わないもんだぜ。」

純「そうだな。」

明「おぅ、じゃまた今度。」

純「またなぁ！」

こうしてみんなはこうして再び皆で会えることを約束し、それぞれの帰路についた。

第四十七話：宿題Ｃｒｉｓｉｓその一（前書き）

明との別れ・・・もつかの間、新たな敵が純を襲う！！

第四十七話：宿題Ｃｒｉｓｉｓその一

――伊藤明の鹿児島への出発日

緑山高校陸上部は学校で部活をしていた。

田中先生「本当に見送りに行かなくていいのか？」

純「はい、いいです。それに明だって『見送ってる暇があったらいっぱい練習しろ』って言うだろうし・・・・」

田中「そうか・・・・」

【フォッフォ、言うようになったのぉ。】

純「それに・・・・」

【女の亜紀が会わないって言ってるのに男の俺が会うことは出来ないよ。】

こうしてこの件は嵐のように過ぎ去り、夏休みも残り僅かとなった。

第四十七話：宿題Ｃｒｉｓｉｓその一

純「あぁぁぁ！夏休みの宿題終んねぇ！」

咲「あんたサボってるからよ。」

純「そうそう・・・って姉ちゃん人の部屋勝手に入ってくんなよ！」

咲「あをたのうめき声が聞こえたから心配して来てやったのよ。」

純「そうかぁ、ってか姉ちゃん宿題手伝ってよ！」

咲「はっ？嫌よ！めんどくさいし。」

純「あっ、もしかして高一レベルの問題が大学生にもなってとけないんじゃ・・・・」

咲は図星だった。しかし・・・・

咲「バ・・・・バカ言ってんじゃないわよ。こんなの簡単よ！」

純「じゃぁやってよ。」

咲「ま・・・・任せなさい！」

咲は純の宿題を取り上げ、咲の部屋へ持っていった。

咲「とは言ってみたものの・・・・」

咲の机の上には数学と英語の宿題があった。

咲「とりあえず解いてみるか・・・・」

咲と宿題との戦いが火蓋をきって落とされた。

第四十八話：宿題Ｃｒｉｓｉｓその二（前書き）

宿題を任された咲。姉の意地で頑張るか・・・・

第四十八話：宿題Ｃｒｉｓｉｓその二

咲「まずは英語からよ。」

咲はとてつもない早さで名前を書いた。

そして・・・・

咲「分かんねー！」

咲はギブアップした。

仕方なく咲は頭のいい友達に電話をすることにした。

咲「もしもし真綾？」

真綾「あっ咲じゃない、久しぶりぃ、どうしたの・・・・」

咲「実は・・・・」

咲は事情を話し、真綾とカフェで会うと約束した。

咲は家を出ようとすると

純「ぉやぉや？お姉さま、どこへお出掛けですか？まさかお姉さまに限って逃げ出そうってんじゃないですよねぇ！」

咲「ふっ、今に見てなさいよ！」

ゴゴゴゴゴ！

二人の間に火花が散った。

――カフェ前

そこには腕時計を見る根津真綾の姿があった。

咲「真綾ぁ！」

咲が走って真綾の方へ向かった。

真綾「咲！久しぶりーっ！変わってないわねぇ。」

咲「真綾だって。」

真綾「じゃぁ外も暑いし冷房のきいたカフェの中に入りましょ。」

咲「うす！」

こうして二人はカフェの中に入っていった。

咲「早速本題なんだけど、真綾この問題解ける？」

真綾は咲から受け取った問題をザッと眺めた。

真綾「解けるわ。」

咲「よかった！さすがに難関大学に通ってるだけあるわね。じゃぁ早速・・・」

真綾「ねぇ咲。これ純君の宿題よね？」

咲「？・・・・そうだけど・・・・どうしたの？」

真綾「それなら私はこの問題を解くことは出来ないわ。」

咲「ってぇぇぇぇ！」

咲は動揺した。

第四十九話：宿題Ｃｒｉｓｉｓその三（前書き）

真綾はなぜ純の宿題ができないのか！！

第四十九話：宿題Ｃｒｉｓｉｓその三

真綾「私はこの問題を解けない。」

咲「えっ・・・なんで？」

真綾はため息をついて言った。

真綾「これが純君のためになると思う？」

咲は『ハッ！』とした。

真綾「あなただって大学受験の苦しみを分かってるでしょ？高一の時にサボってたらあの子の将来はないわ。」

咲「・・・そうよね、私が変な意地張ったばっかりに。・・・」

真綾「よし、こうなったら今日私暇だし咲ん家行きましょ！」

咲「そうしよう・・・ってぇぇぇぇ！」

二人はカフェを出て、家に向かった。

咲「よし着いた。」

真綾「わぁぁ、懐かしいわ！昔はよく遊んだものよねぇ。」

そして二人は家に入った。

咲「ただいまぁ。」

純「姉ちゃん、何しに行ってたん・・・・・・って真綾さん!?」

真綾「ちゃお!純君。元気してた?」

純「元気って・・・・姉貴、なんで真綾さん連れてきたの?」

咲「何って・・・・それは・・・・」

真綾「あなたに勉強を教えに来たのよ。」

純は呆然とした。

純は高校受験の際に真綾に密着家庭教師をしてもらい、とてもしごかれたことがあった。

咲「まぁ色々あってこうなっちゃったの。まぁ・・・・真綾さんのスパルタは半端ないけど・・・・諦めて自分の力で宿題しなさい。」

純「そんなぁ・・・・」

真綾「はい純君。ごちゃごちゃ言わずにとっとと宿題始めるよ!」

純「ひぇぇ!真綾さんの必殺スパルタが始まった。」

咲「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。」

咲は純が生きて帰ってくることを祈った。

第五十話：宿題Ｃｒｉｓｉｓその四（前書き）

ついに始まってしまった真綾のスパルタ！そして物語は５０話へ・・・

・

第五十話：宿題Ｃｒｉｓｉｓその四

咲「純、生きて帰ってきて・・・・」

咲は天に運を任せた。

そして真綾はスパルタモードに入った。

真綾「まずはこれから解くのよ」

純「・・・・はい。」

真綾「次はこれ！」

純「はい！」

真綾「さらに次も行くよ！」

純「うっ・・・・はい。」

真綾と純の宿題戦争は実に１０時間に及んだ。

真綾は純の解いた宿題を一通り眺めた。

真綾「よし、一通り出来てるわ。これで大丈夫ね。」

純「こっちは全然大丈夫じゃないよ・・・・・」

真綾「あっいけない！もうこんな時間！あたしデートの約束あった

んだった！じゃまたね～」

純「二度と来んな！」

こうして純の宿題戦争は幕を閉じた。

咲「それにしても大変だったわね」

咲は愉快そうに笑った。

純「くそ・・・姉貴のやつ・・・覚えてろよ！」

咲「でも宿題終わったんだから残りの夏休みは遊び放題ね！」

純「いや、それが・・・」

咲「どうしたの？」

純「真綾さんが俺に残りの夏休みも勉強不足にならないようにって、特別課題作ってきたんだ・・・」

咲「なんですって！」

純「今年の夏休み・・・死んだ」

――次の日

学校での部活だ。

田中「えー、今から新人戦に向けて新しいリレーメンバーを決めた

いと思う。」

一同「俺がやる！」

新人戦・・・東京にある緑山高校は支部、都、関東という感じに勝ち進める大会である。

純【そうか・・・これは全国まで進まないから明には会えないな・・・】

由香「あんた、今明のこと考えてたでしょ。」

純「えっ？なんで分かったの？」

由香「ふふふ、あんたのことなんてお見通しよ。」

純「そうか、ハハハ。」

この会話を遠くで見ていた亜紀は・・・

亜紀「フフフ、あなた達、お似合いだわ。」

と言ったり言わなかったりしたのだった。

第五十一話：メンバー選出その一（前書き）

リレーメンバーを決めるべく頑張るのであったとさ。

第五十一話：メンバー選出その一

浩介「よぉし、リレーメンバーになるぞぉ！」

純「へぇ、浩介もリレーメンバーになりたいんだ。」

浩介「そりゃそうだよ、メンバーに入りゃアピール出来るしな。」

純「でもお前マイルリレーのメンバーじゃん。」

浩介「明だって両方やってたんだから大丈夫だよ！」

純「確かにな。ん？・・・ってことはマイルも明が抜けてメンバー足りないのか・・・」

由香「なら純、あなたがやりなさい。」

由香がさっそうと現れた。

純「って由香！いきなりだなおい。でも俺・・・長い距離は・・・」

由香「バカねぇ、長い距離走って体力つけて、そんでもってインハイ行くのよ。」

純「あっ、なるほど、そりゃいい考えだな！」

浩介「ってことで俺は四継、純はマイルのメンバー目指そうぜ！」

純「おぉ！」

由香「ふふふ、単純な男ね。」

純「なんか言ったか？」

由香「別にぃ～。」

由香は口笛を吹いてごまかした。

こうしてメンバー決めは始まった。

決め方は１００ｍを走って一番速いものがメンバーという具合だ。

浩介「うっ、俺１００ｍのベスト１２秒なんだよな・・・」

浩介は負のオーラを出した。

純「っていきなり何さ！」

浩介「・・・まぁ・・・落ち込んでてもしょうがないからなぁ・・・この夏で俺だって成長したんだ！」

純「そのいきだ！よし、浩介。暴れてこい！」

浩介「うすっ！」

こうして浩介はメンバー決めの１００ｍのスタート地点へとたったのだった。

第五十二話：メンバー選出その二（前書き）

浩介が走る！！色々走る！！！！！

第五十二話：メンバー選出その二

浩介がスタートラインに立つと、緊張感がビリビリ感じられた。

由香「大丈夫かしら・・・・」

純「なぁに、あいつならきっとやってくれるさ。」

由香「そうよね！」

そして計測はついに始まった。

「位置について、よーい！」

みんなに緊張が走る。

「パァン！」

浩介は勢いよく飛び出した。

純「いけぇ浩介！」

純は目一杯応援した。

そして・・・・

浩介はゴールした。

気になるタイムは・・・・

「11”84」

浩介「・・・よっしゃぁ！自己新！」

純「良かったじゃん！」

由香「いいや、まだ油断は出来ないわよ。なんせまだあの人がいるんだから。」

純「あの人？」

ソバスチャン「私の事ですね。」

なんとそこには・・・

・ベストタイム：11”96

・好きな食べ物：味噌汁

・誕生日：1月1日

・血液型：A型

・利き手：左

のソバスチャンがいた。

由香「どんだけ調べあげてるのよ！」

ソバスチャン「まぁ私だってリレーメンバーに入りたいんで、手加減はしませんよ。」

浩介「望むところです。」

そしてソバスチャンはスタートラインに立った。

そのオーラは浩介以上のものだった。

浩介「こ・・これがソバスチャン先輩の集中力・・・・凄い。」

鈴木「そりゃあいつは毎日座禅を一時間してるからな。」

いきなり鈴木が入ってきた。

純「っていきなり来るなんてビックリしますよ！」

鈴木「わりぃわりぃ、それとソバスチャンはみんな以上に努力を積み重ねてきた男なんだ。」

浩介「どういうことですか？」

鈴木「あいつは雨の日も風の日も、いつも影ながらにコツコツと練習を積み重ねてたのを俺は知ってる。」

浩介「それなら僕だって・・・・」

鈴木「いいや、あいつはお前以上に強い心を持っている。」

浩介「！？」

鈴木「あいつは生まれたときからなぁ、ずっと足の速いセバスチャンと比べられる人生だったんだ。」

そう、これから話す過去話こそが、セバスチャンと、そしてソバスチャンの運命を変えることになるのだった。

第五十三話：兄弟～衝突～（前書き）

セバスチャンとソバスチャン、二人の過去とは！！

第五十三話：兄弟～衝突～

僕ら兄弟はアメリカのテキサス州で産まれた。

しかし産まれてからというもの、何に関しても才能のある兄と比較されつづける人生。

その事に嫌気がさし何か一つでも兄に勝ちたいと思い、僕らが小学校卒業時に父の転勤先である日本という国の語学を一生懸命勉強をした。

そして・・・・

――中学校入学日

ソバスチャン「うわぁ！ここが日本の中学かぁ」

セバスチャン「ニホンノガッコデカイネー！」

そして二人は入学と同時に陸上部へ入った。

しかし現実は甘くはなかった。

友達Ａ「うわぁセバスチャン足速いなぁ・・・・」

友達Ｂ「同じ兄弟なのにソバスチャンとはえらい違いだな。」

友達Ａ「しーっ！ソバスチャンに聞こえてるよ。」

そう、またしても兄であるセバスチャンと比較されるのである。

ソバスチャン「どうしていつもこうなるんだ・・・」

その度に兄貴のセバスチャンを恨むようになった。

そしてある日事件は起きた。

それは兄弟二人で買い物に出掛けている時だった。

歩いていると、セバスチャンのファンの女性が写真を取ってくれと言ってきたのだ。

セバスチャンはそれを快くＯＫした。

そして・・・

セバスチャン「ゴメンヨ～、マッタデスカ？」

ソバスチャン「兄貴は人気者でいいよな。」

ソバスチャンが嫌味たっぷりに言った。

セバスチャン「ソンナコトナイネー」

セバスチャンのノー天気な対応に遂にソバスチャンはキレた。

セバスチャン「兄貴はいつもそうだ！俺の気持ちも分からないで、ただただノー天気なだけじゃないか！」

そういうとソバスチャンは走ってどこかへ行ってしまった。

セバスチャン「チョ、マツネー！」

セバスチャンも追いかける。

しかしセバスチャンは足を滑らせてコケてしまった。

セバスチャン「オーマイガー！」

その頃・・・

ソバスチャンは走りながら思った。

《どうしていつも・・・なぜなんだ！》

『どん！』

その拍子に何かにぶつかった。

ソバスチャン「痛っ！」

なんとソバスチャンがぶつかった相手は、ヤンキー軍団だった！

第五十四話：兄弟～救出～（前書き）

ソバスチャンがさらわれた？セバスチャンがソバスチャンを救出しに・・・・

第五十四話：兄弟～救出～

ヤンキーA「おいてめぇ、金出せや。」

ソバスチャン「うっ、いきなりなんだ！」

ヤンキーA「てめ～口ごたえすんなやー！」

ヤンキーはそういうと仲間を引き連れソバスチャンを襲おうとした。

ソバスチャンは自慢の反射神経で避けた。

ソバスチャン「ふっ、止まって見え・・・」

『ゴン！』

ソバスチャンが油断している隙に他の仲間のみぞうちが入った。

そしてそのままソバスチャンは敵のアジトに連れていかれた。

一方セバスチャンはソバスチャンを探すべく走り回っていた。

【ナンカイヤナヨカンガスルネ】

そしてソバスチャンはというと、手足を結ばれ完全に動けなくなっていた。

ヤンキーB「素直に金わたしゃぁ済むものを。」

ソバスチャン「くっ、早く解放しろ！」
ヤンキーC「そいつは無理な話だな。」
ソバスチャン「な・・・なんだと？」
ヤンキーA「本当の俺らの狙いは・・・・」
ヤンキーがソバスチャンの耳元で囁いた
ソバスチャン「なっ、そんな・・・・」
『ゴロガシャーン！』
いきなりアジトの古い扉が破壊されたのだ。
ヤンキーB「な・・・なんだ！」
セバスチャン「ワガオトウトヨ、サガシタゼ。」
セバスチャンがさっそうと登場した。
ソバスチャン「なっ・・・なんでここが分かったんだ・・・・」
セバスチャン「フッ、『キョウダイアイ』ッテヤツカナ。」
ヤンキーC「ふっ、ふざけたことぬかすんじゃねぇ！」
ヤンキーCはセバスチャンに当たりにいった。

するとセバスチャンは柔道技の大外刈で反撃した。

ヤンキーC「ぐふっ！」

ヤンキーCは倒れた。

セバスチャン「次は誰が相手になるんだ？」

第五十五話：兄弟～絆～（前書き）

そして二人の絆は深まっていく

第五十五話：兄弟～絆～

セバスチャン「ツギハダレガクルネ？」

ヤンキー達はセバスチャンの闘気に後ずさりした。

ヤンキーB「う・うぉりゃぁぁぁ！」

しかしヤンキーBは懐からナイフを出して襲ってきた。

しかしセバスチャンは全く動じず、相手のナイフを持っている手を蹴り飛ばし、ナイフを弾いた。

ヤンキーBは精神的に崩壊し両ヒザをついてひざまづいてしまった。

ヤンキーA「くそっ、こうなりゃ逃げるが勝ちだ！あばよ！」

そういってヤンキーB、Cを担いで逃げてった。

ソバスチャン「はぁ・・・助かった。」

セバスチャンはソバスチャンの元に向かい手足の紐を切った。

ソバスチャン「あ・・・ありがとう・・・あのさ・・・さっきはごめんね。」

ソバスチャンが謝ると、セバスチャンがソバスチャンを強く抱き締めた。

ソバスチャン「お・・・おい、気持ち悪いからやめ・・・・」

しかしソバスチャンは気付いた。

セバスチャンが泣いていた事を。

セバスチャン「ホントニヨカッタ、モシ・・・・オマエヲ・・・・ウシナッタラ・・・・」

それからというもの二人の縁は切っても切れぬ兄弟愛が芽生えた・・・・

鈴木「あいつは・・・・ソバスチャンは兄と同じ舞台で活躍するのが夢なんだ。そしてこれで浩介の記録を抜けばそれは叶うというわけさ。」

純「そうだったんだ・・・・」

浩介「おっと、ソバスチャンが走るぜ！」

『ぱぁん！』

ソバスチャンは走った。

浩介はその時思った。

ソバスチャンの重みのある一歩一歩の走りには勝てないと。

そしてタイムは・・・・

「１１”７９」

こうしてソバスチャンがリレーメンバーに決った。

第五十六話：始まる二学期（前書き）

ついに二学期が始まる！！

第五十六話：始まる二学期

浩介「それにしてもソバスチャン先輩には完敗だぁ～。」

純「まぁ来年頑張れよ。」

二人は河川敷で話していた。

浩介「でもお前の４００ｍも早かったじゃんか！あのタイムはなかなか出ないよ。」

そう、その後に行われたマイルメンバー選出では純が選ばれたのだ。

純「んまぁなぁ。」

純は照れ笑いした。

そして季節は九月。

新学期だ！

当然話題になるのは明の転校だ。

内田「あいつ転校しちまったのか？」

遠藤「俺らに断りなしで？」

純「でも三年になったら帰ってくるって・・・・」

内田「まぁ・・・妹さんが大変だもんなぁ・・・」

遠藤「あいつが帰ってきたら早速合コンだ！」

三人は笑いながら思った。

また明を含む四人で笑える日が来る日の事を。

田中先生「それじゃ、宿題の提出じゃ！」

クラス中がどよめいたが純だけは落ち着いていた。

【ふふふ、俺は真綾さんのせいで宿題をするはめになったんだ。みなのもの、せいぜい苦しむがよい！】

由香「あちゃー、私全然やってないよ。純はやったの？」

純「勿論！見てよこれ。」

由香が純の宿題を見るといきなり笑いだした。

純「・・・どったの？」

由香「あんた・・・お姉さんに宿題手伝ってもらったでしょ？」

純「い・・・いや・・・」

いまいち状況が読み込めない純。

由香「あんた、名前の欄にお姉さんの名前が書いてあるわよ。」

純は見てみると確かにそこには『葵咲』と書いてあった（第四十八話参照）

こうしてそのことはクラス中に広がり、純は宿題を姉貴にやらせたという噂が広まってしまった。

第五十七話：来たる新人大会（前書き）

この日のために練習し、みんな頑張った。いよいよ決戦のとき！！

第五十七話：来たる新人大会

二学期が始まり、幾日か過ぎ、新人大会も近くなってきた。

純「ハハハ、季節が流れんのは早いなぁ。」

由香「そうね、てゆーか来週もう支部予選じゃない！」

純「そうだな。」

純は明の事を思い浮かべ、何かを決したように言った。

純「俺は・・・関東一になる。」

由香「純・・・」

由香には純がなんとなくかっこよく見えた。

そして頬がほんの少し火照った。

【わっ、私ったら何照れてるのよ。】

と思ったのも束の間・・・

純「やっぱり都で三位ぐらい・・・」

由香「揺らぐの早っ！」

そしてとうとうその日はやってきた。

――支部新人

緑山高校

男子

１００ｍ：純、セバスチャン、鈴木

２００ｍ：セバスチャン、浩介、野木

４００ｍ：浩介、ソバスチャン、浜本

女子

１００ｍ：由香、真美、樋口

２００ｍ：由香、亜紀、真美

４００ｍ：亜紀、古屋、ヘレナ

ちなみに初登場の野木は二年、浜本も二年。

樋口は一年、古屋は二年、ヘレナは一年だ！

なお支部新人は二日にかけて行われる。

純「よおし、頑張るぞ！」

まずは４００ｍ予選だ！

純「浩介、かましてやれよ！」

浩介「お、おう。」

浩介は緊張して体がかちこちだ。

するとソバスチャンが・・・・

ソバスチャン「浩介、俺はお前と戦いたい・・・・支部では当たれないから、都大会の決勝までお互いに生き残ろう！」

すると浩介の緊張がほぐれた。

浩介「待ってますよ、先輩！」

浜本「じゃぁ行ってくる。」

選手三人は時が来るのをじっと待つのだった。

第五十八話：序章（前書き）

浜本が４００ｍを走る！そして……

第五十八話：序章

「一組目の方、セットしてください！」

この掛け声で緊張が広がった。

ちなみに浜本が２組目、ソバスチャンが４組目、浩介が５組目である。

浩介「浜本先輩、流れ作ってきて下さいね！」

浜本「おぅ！」

一組目が終わり遂に浜本の番になった。

純はこの後行われる１００ｍのアップを切り上げてまで見ていた。

『ぱぁん！』

一組目が走る。

すごい緊張感だ！

そして遂に浜本の順番になった。

『ぱぁん！』

純「浜本先輩ファイト！」

浜本は先攻逃げ切りで３００ｍまで１位だった。

しかし・・・

他校がラスト５０ｍで迫ってきた。

純「浜本先輩！そのまま行けば予選通るんで頑張ってください！」

そして、浜本は二位でゴールした。

鈴木「うん、お疲れ。多分予選は通過だ。」

浜本「こんなとこで消えるかってんだ！」

三組目も終わり次はソバスチャンだ！

『ぱぁん。』

レースが始まった瞬間、周りの誰もが凍りついた。

鈴木「やはり４００ｍにおいてこの支部じゃソバスチャンにかなう奴はいないな。」

ソバスチャンの圧巻の走りに誰もが固唾を飲んだ。

ソバスチャンはぶっちぎりの一位でゴールした。

ソバスチャンは腰番号を外すと浩介に近寄り肩をぽんと叩いた。

ソバスチャン「リラックスしてけよ。」

この言葉に浩介は心の奥底に眠っていた何かが動き出した気がした。

浩介「行ってきます！」

浩介はそういうとトラックに駆け込んだ。

第五十九話：決戦への一歩（前書き）

ついに浩介の４００ｍ！
このまま決勝へ行くのか？
一方では純の１００ｍも始まって・・・・

第五十九話：決戦への一歩

浩介はスタブロを眺めた。

【俺もこの夏さぼってたわけじゃない、ソバスチャン先輩、自分もすぐそっちの世界に行きますからね！】

再び競技場中に緊張が走る。

そして

『ぱぁぁん！』

浩介は始めから迷いもなく突っ込んだ。

純「いけぇ！浩介、お前の力を見せてやれ！」

浩介は純の期待にこたえるかのように走った。

３００ｍ地点で断トツトップで帰り、そのまま流してゴールした。

浩介の顔は満足げだった。

こうして緑山の４００ｍの選手は全員決勝へ行った。

次は１００ｍだ！

純は飲み物を一口飲んだ。

相当緊張しているようだ。

セバスチャン「オトウトニハマケナイネ。」

セバスチャンは気合い十分だ！

そして鈴木は・・・・

ソバスチャン「鈴木のやつ、すごい集中力だ・・・・」

とてつもないオーラを出していた。

【そういえば夏合宿の時のリレーもこんな感じだったっけ】

純はそう思った。

そして１００ｍの予選が始まった。

最初は純だ！

『ぱぁん！』

流石は純。

『スタートの葵』の異名に相応しいスタートをした。

そしてそのまま一着でゴールした。

続く二人も同じ感じだ。

田中「流石はあの三人じゃのぉ。」

田中先生も満足げだった。

そして、４００ｍの決勝が始まった。

純「浩介、頑張れよ！」

浩介「おぅ、お前も決勝頑張れよ。」

二人は堅い握手をしてその場を後にした。

その時純には浩介の背中が大きく見えた。

第六十話：突き抜けろ！（前書き）

ついに４００ｍも都大会をかけた決勝へ！果たして……

第六十話：突き抜けろ！

４００ｍ決勝は１組８人で３組、総勢２４人で行われる。

都大会に行けるのはその内８人で、これは１００ｍも２００ｍも同じだ！

因みに一組目は浜本、二組目はソバスチャン、三組目は浩介だ！

『ぱぁん！』

一組目が始まった！

浜本が走る、周りも走る。

浜本が３００ｍを抜けた時点で二位だった。

純「いけぇ、浜本先輩！」

浜本は走った。

精一杯・・・

しかしそこに神は微笑んではくれなかった。

浜本・・・五位。

この時点で浜本の都大会は潰えた。

浩介「浜本先輩・・・・」

ソバスチャン「他人に気を使う気があるなら自分に気を使った方がいい。」

浩介「へ？」

ソバスチャンはその言葉を残し、スタート地点へ着いた。

『ぱぁん！』

ソバスチャン・・・何と言う男だ。

ソバスチャンは他の追随を許さない４８”９０でゴール！

浩介「ソバスチャン先輩・・・・」

浜本「さっ、浩介早く行け！」

浩介「はっはい！」

浩介は気合いを入れ直しスタートラインへたった。

『ぱぁん！』

浩介は始めからハイスピードで飛び出した。

純「あいつ、あんなに飛ばして大丈夫かなぁ・・・・」

鈴木「なぁに、あいつはこの夏でとても力は付いたはずだ、仲間を

信じてやれ！」

純「はい！浩介行けぇ！」

浩介もそれに応えるかのように走った。

しかしラスト１００ｍ・・・・

純「浩介！後ろ来てるぞ！」

浩介は焦り始めた。

そして二人に抜かれゴール。

三位となった。

浩介「くそっ、もっと俺に力があれば・・・・」

浩介は悔しがった。

純「今のは力が出しきれてなかったな・・・・」

ソバスチャン「まぁタイム的に都は行けただろうからこれからビシバシメンタル面も鍛えるぞ！」

浩介「はい！」

こうして４００ｍは幕を降ろした。

最終話：旅立ち（前書き）

純の新人大会１００ｍ決勝もいよいよ大詰めといったところだが・・・

最終話：旅立ち

次はいよいよ純達の１００ｍ決勝だ！

純「絶対に都に行ってやるぜ！」

他の二人もその意気だった。

しかし・・・・

由香「・・・・純？」

純は決勝前に突然倒れてしまった。

由香「きゃー！」

純は直ぐ様病院に連れてかれた。

純の左足は酷く腫れていた。

由香「ちょ、あんた！何なのよこれ・・・・」

実は純は昔起きた交通事故での左足の骨折が完全に治っていなかったのだ（６話参照）

こうして純の新人大会はあっけなく幕を閉じた。

――病院

純「ん・・・んん。」

由香「純？」

純は目を覚ました。

純「あー！俺試合どうなったの？」

由香「あんたねぇ・・・」

由香がキレそうになったが堪えた。

由香「純、あなたは試合前に倒れたの。」

純「え？」

純はようやく自分の左足の激痛に気付いた。

純「イテテテテ！な・・・なんだこれ？」

由香「あんた、前に骨折したんでしょ？それが原因よ。」

純「そうか・・・」

純は少し落ち込んだ。

都に行けなかったのだから無理もない。

だが・・・

純「次はインハイ目指すぞー！」

すぐ元気になった。

由香「男って単純・・・」

しかし由香は純の笑顔に少し安堵感を覚えた。

由香「さぁ！まずは怪我を治さなくちゃ始まらないわ！」

純「あぁ！治ったら冬連だ！」

純の新人大会は終わったが、次のインターハイで明に会うことを強く決意した。

そして冬が過ぎ春が来た。

純の新たな人生が幕を開ける！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8076b/

ゼロ

2010年11月11日08時27分発行